昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和十二年五月廿八日印刷（毎月一回）
昭和十二年六月十五日發行（一日發行）
「道頓堀」第百廿九輯 第十二年

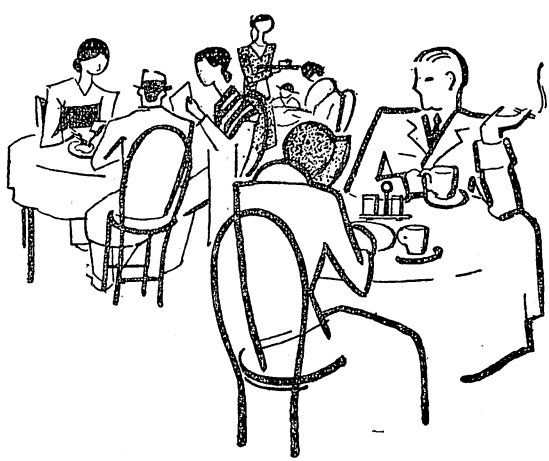
芝居の研究雑誌

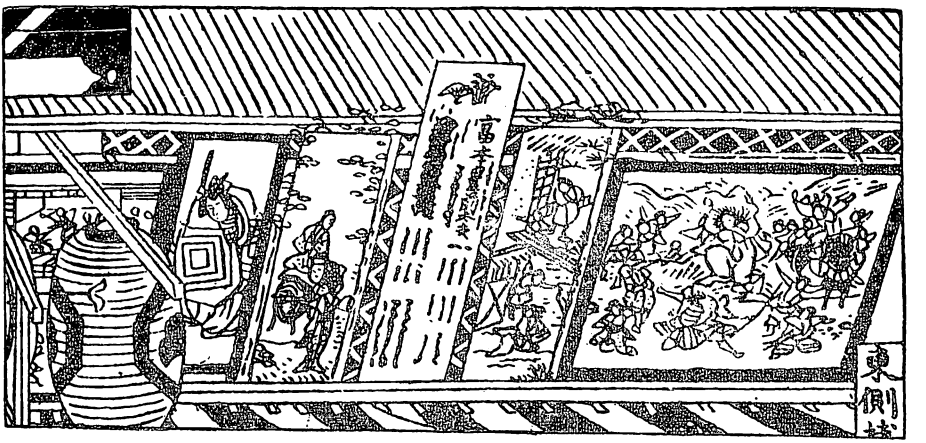
道頓堀

第十二年
第百廿九輯

夏の
大軌百貨店
大阪上六

風味必ず御氣に召す
天ぷら御料理
季節向御料理
佛蘭西御料理
芝居情緒と食道樂
喜久屋食堂
道頓堀戎橋北詰
御芝居の歸りには打ち揃ふて
お座席で是非御會食を！
支店
大阪支店　心齋橋筋八幡筋角
北新地裏町
京都支店　木屋町ドングリ橋





★道頓堀 第十二年 第百廿九輯 目次★

グラフ……六月興行各劇場舞臺集……本誌特寫

花柳君に寄す……森ほのほ（三）

現代喜劇の諸問題……中井駿二（四）

特輯讀物 一問一答 天勝師匠樂屋訪問記……（二二）

劇評春秋！

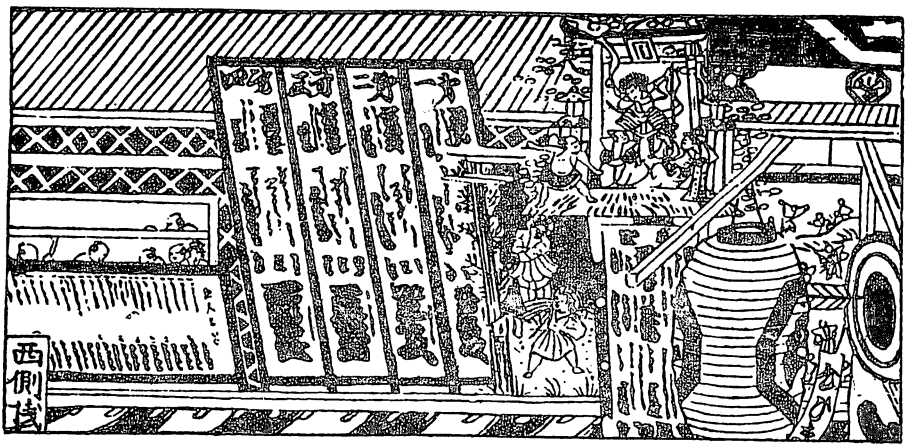
歌右衛門追善の舞臺から……姉小路孝（一八）

東西合同青年歌舞伎見物記……新橋柳一郎（一九）

五月の芝居往來……西尾福三郎（二〇）

舞臺と棧敷……森あき子（二二）

關西新派劇 はりきりぼーい……松竹亭小エンタッ（二四）



喜歌劇「血の樣な椿」に就いて……南部邦彦（二）
「瀧蓮子」のこと……阪上勝芳（三）

芝居

見たまゝ

路傍ノ石（歌舞伎座上演）……（九）
女夫波（歌舞伎座上演）……（一六）
原田甲斐（浪花座上演）……（二四）

映畫の頁

衣裳花嫁（松竹大船）……（三六）
神秘な男（松竹大船）……（三七）
女同志（新興大泉）……（三八）
合歡の並木（新興大泉）……（三九）

道頓堀俳壇……日比煤蓑選（四一）

劇壇往來……（四〇）
編輯後記……（四〇）

冷用
銘酒

白雪

灘・丹伊・津摂
小西酒造株式會社

東京大新派總動員

歌舞伎座上演

第一〝路傍の石〟

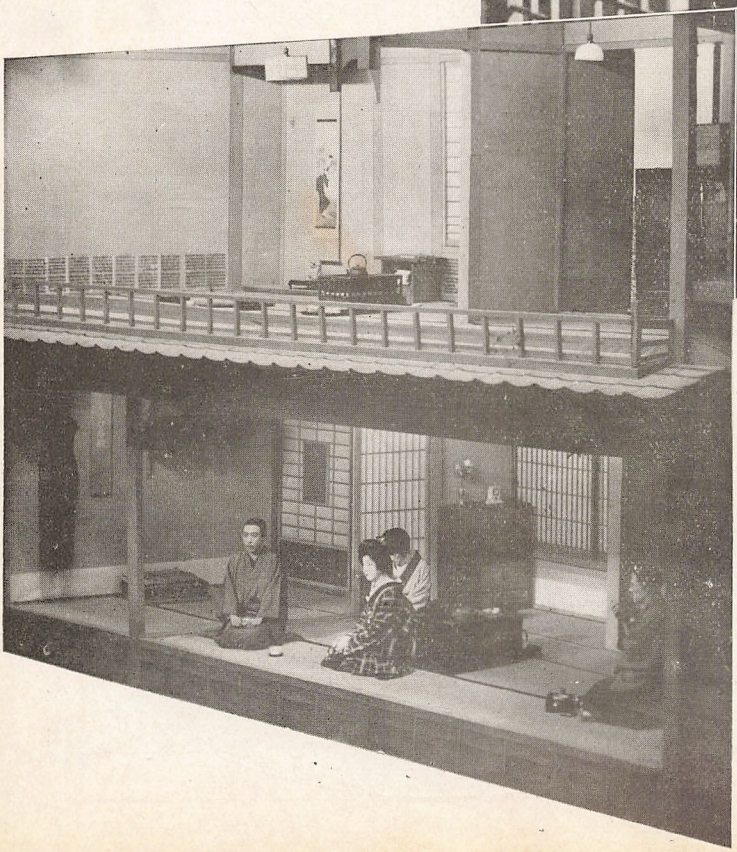
（上）吾一の母おれん　花柳
生徒　愛川吾一　藤間

（下）町の病院の一室　舞臺面

第二〃戀すてふ〃

（上）料亭奈加屋の二階座敷
花柳のお花

（下）おたきの家
喜多村のおたき
伊志井の勝丸
大矢の重役矢島



東京大新派總動員

歌舞伎座上演

東京大新派總動員

六月一日初日 毎晩時開幕

目日二・初日
幕開時三

初日は各等割引値段

1 路傍の石 四幕

山本有三原作
川村花菱脚色

（大阪朝日新聞連載）

日本全土の識者の同情をその一身に集めてゐる少年吾一の小説生活時代から吳服屋の小僧となり憧れの東京へ行くまで苦の母を喪つて洗張屋に伴はれて九場に繼ぎ四幕を會は母と子に反映する社會の涙をそゝります花柳の世相と名役藝術の雪一のコンビは原作以上の興味を各場に展開いたします

2 戀すてふ 二幕

三好一光作
田島淳蛭台監督

（雜誌舞台所載）

美しい女義太夫を繞つての若い社長の戀の爭奪戰は青年醫色使ひと樂屋花やかな料亭を背景にこの篇は東京新派最近の繪卷を見るから情趣の繪卷を繰り擴げます合部花柳一小堀東京英大藤村柳大矢言伊志井喜多村河内部總出演で東京新派でなくては絶對に見られぬ大舞台を御覽に入れます

3 女夫波 四幕

田村花菱脚色並
川口汀原作舞台監督

放埒な姉の黄金箱〝明治文壇の代表作〟女夫波〟新派の持つ若く美しいマダムを中心に外遊中に逝つた家庭悲劇その夫の性愛につき世の涙と感がある其の友情と父と娘との葛藤は東京、新派總動員に依つて明治劇壇の歴卷は茲に多分の近代調に驚られて脚光を浴びます……!!

河村合武式雄　西田部　成脇滋　下田雄　高梨猛　苦宮堂　武村路　河合新　藤井石　英太郎　木村操　雪岡光次　白河青峰　吉岡大郎　成島惠三　若井信男　南一郎　大鬼城　伊東寛　喜多志井　村緑寛郎

小堀　山田九州男　柳本百合子　松千代枝　吉川公乃　柳川はるこ　市川紅梅　藤間廣　松本賢一　大矢市次郎　柳堀永二　花彰章　小山中永章夫　松下團誠　山中九郎　藤井昇一　波邊一郎　花和幸　菊地正助　瀬戸英一　柳章太郎

大阪歌舞伎座

前賣

お好きな時間にお好きな芝居が自由に見られる

一幕劣は毎日開幕前に發賣致します

前賣團休專用電話（戎）二八二六——八

一等席は五日前より發賣・貳等より櫻までは前日より發賣いたします

◇冷房裝置完備◇

初日割引値段

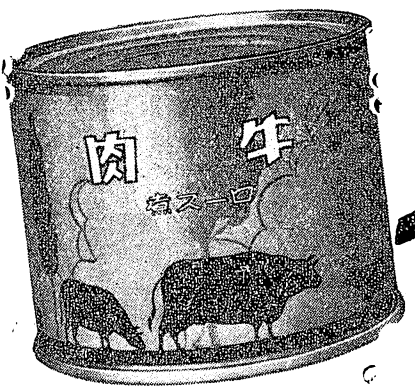
	櫻	菊
二等	三十五錢	二・八円五十錢
三等	三十五錢	二・五円十錢

平常値段

	櫻	菊
二等	三・五円十錢	二・八円七十錢
三等	二・五円十錢	二・一円八十錢

金鶏印罐詰二大製品

1. 純良精選の牛肉
   で御座います
1. 不意の御來客に
1. 御酒ビールの御友に
1. キャンピングに
1. ハイキングに
1. 各地百貨店
   著名食料品店
   に販賣致して居ります
1. キンケイ印を御指定下さい



洋酒・食料品・罐詰問屋
大阪市東區豊後町三番地
株式會社 横山商店

第三〃女夫波〃

（上）花柳の俊子
大矢の橋見
近松の菊美

（右）小堀の英夫

（左）伊志井の高嶺輝彦
英の時子

東京大新派總動員

歌舞伎座上演

〃二代目天　勝〃

證券金融

有價證券賣買

株式會社

日本信託銀行

本店　大阪市東區今橋二丁目

支店　東京市日本橋區南茅場町

京都中央卸市場

商號

果實問屋

電下(5)六〇五六〇五五六番

京都松竹各劇場果實

一手販賣

BEST BRED

高級パン。和洋菓

雪印アイスクリーム

工場監督中村藥學士

京都松竹劇場一手販賣

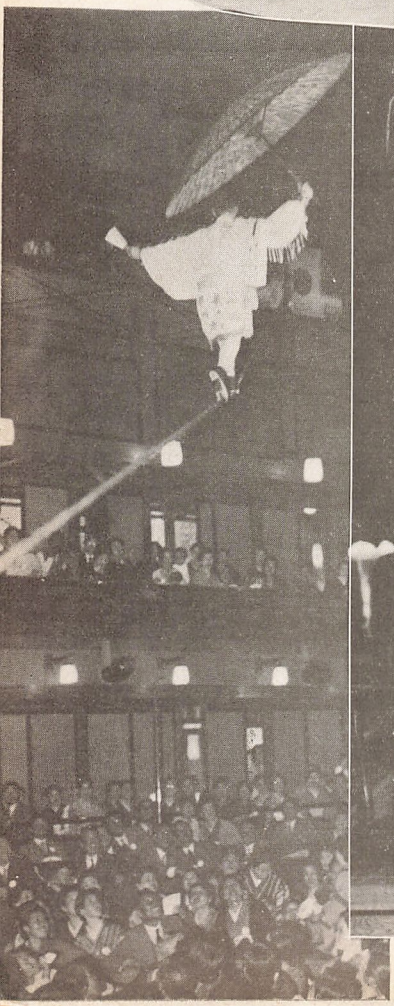
京都東山五條

電祇(6)二四一八番

二代目天勝襲名披露特別興行

中座

日本の誇る、世界的魔術の女王初代天勝四年振りに來演、相變らず、お若いところを見せてゐます。



激讃の波に乗つて颯爽三の替り六月公演の

〝劇派新西關〟　座角

〝路の傍の石〟

先野次生　の川笈

少一吾年　の田保久小

便所の防臭に困りおる方は今直ぐ

製創氏郎太彰林　士學藥

印パタフ
脱臭劑
アポロ
是非御使用あれ

使用簡潔
十滴奏効
無害無毒

家庭必備品

「アポロ」ハ一つの便所に大抵十滴撒布すれば充分奏効します。

「アポロ」ハ溶かすことがいりません、このまゝ撒布すれば宜敷いから少しも面倒でありません。

「アポロ」ハ他の藥（カンプラ油、デシン、ナフタリン、クレゾール、樟腦など）と異ひ化學的變化により放臭物を無臭とします。

「アポロ」ハ毒性がなく無害で便所にアポロの臭ひが殘らぬ爲め汲取人がイヤがりません。無論農作物にも無害です。

「アポロ」ハ使用法が輕便で奏効的確、用量が僅かですから經濟にもなります。

▼使用法　一回十滴乃至十數滴づゝ（場所により多少の加減を要す）一回多量に撒布するは却て効力を減ずる事あり使用後は栓を堅くし冷所に置かるべし。

（定價　一瓶　小金五拾錢　大金壹圓）

到る處の藥店
各百貨店に販賣す

發賣元

大阪市東區伏見町三丁目　光榮商會　電話本局三三一五番　振替大阪三三一一七番

—番組は毎週木曜替り・全館冷房で秋の爽涼さ—

チヨトと一時間
世界の新智識を

散策の途上で
明日の話題が
得られます

朝日世界ニュース
大毎國際ニュース
讀賣發聲ニュース
パラマウントニュース
近畿聯合ニュース其他

優秀なる短篇映畫
極彩色漫畫を上映

大阪ニュースハウス

南區戎橋・電話戎二六二八二

御觀劇には是非プレイガイドの御利用を

芝居の切符は「プレイガイド」で御求め下さいますのが一番お德で御座います。御場所もよろしいし一枚の切符でもすぐ御屆け致します。殊に團體にて大勢樣御觀劇の場合は特に御安く御相談致します

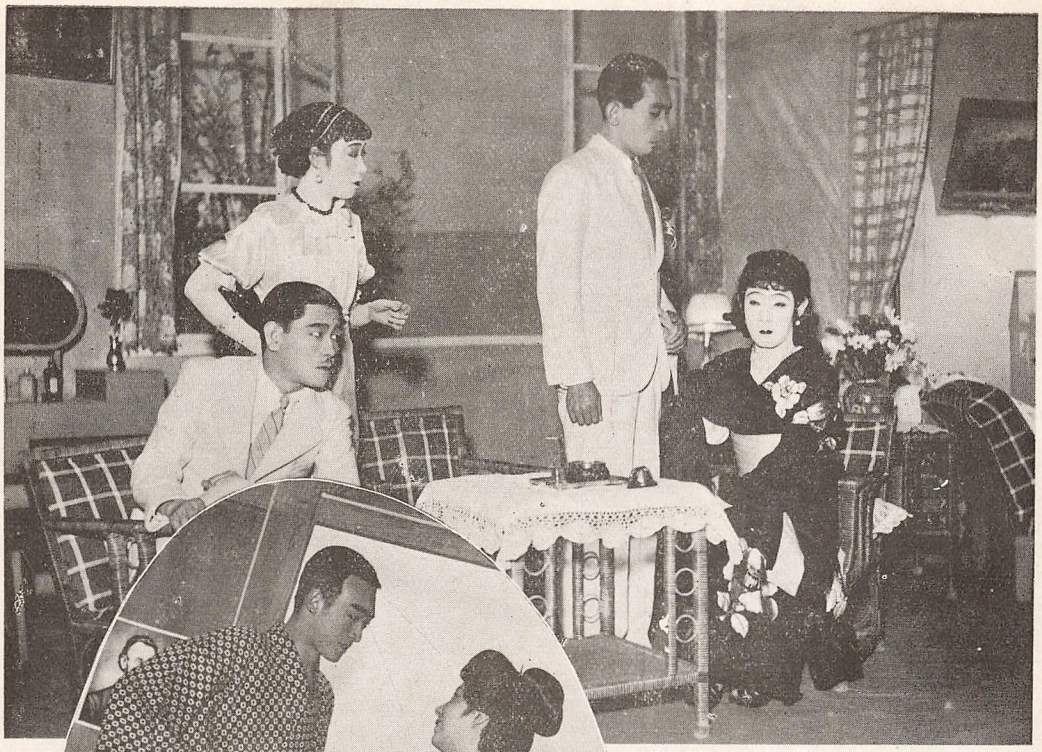
プレイガイド觀劇會
新會員大募集

第壹
一、會費一ヶ月金壹圓也
一、觀劇回數　年四回
一、劇場名
歌舞伎座又ハ京都南座、中座、浪花座又ハ角座

第貳
一、會費一ヶ月金壹圓也
一、觀劇回數　年四回
一、劇場名
歌舞伎座、中座、浪花座又ハ角座、寶塚大劇場又ハピクニック

●御注意
詳細は御一報次第規則書並ニ月報御送り致します。

大阪市北區中之島朝日ビルヂング一階
プレイガイド
大阪バス營業兼
株式會社旅の平八社
朝日ビルヂング營業所
電話北三三九〇番
電話北三九五九番
電話北四五一〇番
電話北五五一七番
電話北五五一四番



角座關西新派劇舞臺寫眞集

上より 〃想思草〃 〃路傍の石〃 〃妻戀道中〃

〃道街ざくや炎情〃　上

〃魂　察　警〃　下

浪花座

堀頓道修井金

第三回進出公演

月刊・演劇研究・雜誌

演類

第十二年

六月號

第百二十九輯

演劇は大衆の心に胸に育てあげられるものでなければならない。藝術的高踏的といふ言葉や主義によつて、技術者や關係者の獨善、自己滿足であつてはならない。

流行語で云ふならば、まさに大衆と演劇は抱合へばよいのである、そこに大衆の社會進歩もあり、演劇の發展進化もあらうと云ふものだ。

花柳君に寄す

森　ほのほ

花柳君――

君はこの間の南座が、君の豫想した程の成績が上らなかつたので大分痛を立てゝゐられたやうだ。『僕はとても京都は好きなんだが、京都の人は僕を愛してくれない』などと愚痴ッぽい言葉さへ聞かされた。それにはいろいろの事情もあり、原因もあらうと私は其時答へて置いたが、それはその場だけの間に合せの、君への慰めでもなかつた。その夜、私は家へ戻つてからそれに就いて考へてみた。

先づ、劇場外の事情――つまり世間から言ふと、無論、物價騰貴から來てゐる不景氣が第一だが、當時祇園の都踊に續いて今年初めてのやさか踊があり、先斗町の鴨川踊があつたことも見のがせない。それに、時候も近頃流行の寫眞熱や運動熱に伴ふハイキングに恰好であつて劇場の脚光よりも、野外の紫外線に引き寄せられた人々は決して尠くないと思ふ。

それにもう一つ――これは私の臆測だが、南座の經營者側も、俳優の方も、見物の入に就いて些か安心し過ぎた形が無かつたか、言ひ替へれば左程宣傳やタイアップに苦勞する必要無しと心をゆるしたのでは無かつたか。どうも私には其處に違算があるやうな氣がする。

次に、劇場の内部的事由といふか、芝居そのものゝ側から言ふと、開演時間の三時といふのが、大阪は知らず京都には不適當であつた。時間を早めたのは無論、狂言が多過ぎたから

で、實をいふと『淺草寺境内』の如きは見物もあまり悅んではゐなかつたし、あの盛り澤山の狂言からはぶいても、差支への無いものであつた。今度は『路傍の石』だけが多過ぎたといふ樂屋の人の聲を、通りすがりに私は聞いたが、それは甚だ淺薄な見方であり、無考へな言葉でもある。私に言はせると、『路傍の石』だけが本當に今度の芝居で、あれがあつて救はれたのだ。私は新劇座のシバヰを未だ見ないので知らないが、月末に催される豫定であり乍ら、實現されなかつたその新劇座の狂言の一つのやうな氣がして、あれを非常に悅しく見物したのだ。

それから花柳君。

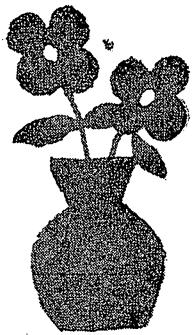
君が『京都の人は愛してくれない』といふやうに、京都人が東京オール新派に、假に親しみを持たないとする——その原因は東京新派と京都人との馴染が薄くなつてゐることではなからうか。私は劇場側にそれを再考して貰ひたいと思つてゐる。もつと來演度數を多くして（少くとも年四回位）所謂顏馴染をつけて置くことが何よりも必要だと思ふ。

終りにもう一つ、これは、京都が映畫製作所で、自然京都人が映畫に親しみが多いことも見のがせまい。

映畫愛好者は映畫によつて——近頃の『蒼氓』とか、裏町とかいふ日本現代の社會劇を——それもかなり質の良い文藝作品を見て來てゐる。學生やサラリーマンにそれがかなり多い。彼等は二十錢乃至五十錢を支出すれば、いと容易く文藝的作品を鑑賞し得るのである。何を好んで高い觀劇料を拂ひ、長い時間を徒費する必要があらうと彼等は言ふ。

なほ言ひ替へれば、彼等が演劇に對して渴望する處のものがありとすれば、それは現代の社會劇でなくて、寧ろ浪漫的な歌舞伎か、喜劇のナンセンスやウィットか、或は明朗輕快な舞踊かにあるのではないかと思はれる。

以上、私のひそかに考へたところのものが多少とも君の御參考になるなら、私としてこれに越す悅びはない。なほ君から劇場當事者へも傳へて、考慮を拂つて貰へるやうお願ひ申して置かう。さらば又來月、大阪の歌舞伎座で……。



現代喜劇の諸問題

中井駿二

一

近頃、喜劇を要望する聲が殷んなやうである。現代において喜劇が求められるのは、樣々な理由によるものと考へられるがそのうち最も根源的な理由と思はれるのは、現代の世情であらう。洵に現代はあらゆる部門において、暗澹たる精神的な雰圍氣によつて蓋はれてゐる。例へば戰爭の不安、諸物價騰貴による生活の不安、重稅の不安、學問やその他精神的に卓れたものに對する社會的評價の低下、從つてインテリゲンチヤがその權威を確保し得ない不安、道德の廢頽、それに伴ふ生活信條の喪失。全く現代においては我等如何に生くべきかといふことについて確乎たる信念を持ち續けることが甚だしく困難であるとさへされてゐるのである。たゞ金錢のためにのみ魂をぶち込んでそれに些の寂寥をも悔悟をも感じ得ない動物的な人間のみが、横行してゐる現代にあつては、淸純な魂をもつ人々にとつてはあらゆるものが暗く陰慘であると感じられるのは當然であらう。

そのやうなとき求められるのは、何よりも淸朗な笑であるといふことができるであらう。現實の生活の暗さから、たとへ一時的にもせよ、脫れ出でようとする熾烈な欲求が演劇のみならず、映畫や文學においても明るく輕快なものを求める聲となつて現れたことは當然であるといはなければならない。

二

けれども茲で考へなければならないのは、そのやうな笑を求める聲に應じて立ち現れてゐる演劇現象としての現代喜劇が委く正しい意味での笑を、本質的な意味での喜劇精神を備へてゐるものであるとは受けとり難いことである。

もともと喜劇とは人間と世界とをその快濶、滑稽な側面から觀察し、描寫し、觀客の理解に訴へて笑を導き出し、さうすることによつて觀客の心境にある均齊せる狀態、言葉を換へていへば悲劇が淨化（カタルシス）によつて惹き起す快感を、喜劇は笑によつて誘發しようとするものであつた。悲劇が人世の嚴肅な事實を描出するのに對して喜劇は人生の可笑味を表現するものであつたのである。

いまこゝで喜劇についての哲學的な釋義を行ふ遑を筆者は持

たないが、ベルグソンによれば滑稽はものゝ凝固されたものをときほぐす場合の一つの契機であると考へられるのである。われわれは日常の生活においては常識によつてとりかこまれた表面的な生活をしか營んでゐない。もともと常識は日常の生活の利便の爲めつくられた巧利的な性極をもつ約束であり、判斷あるにすぎない。しかしわれわれの生活にはさうした表面的なものゝ一層奥深いところにかくされてゐる本性的ないはゞ眞實なる生活がある。この生活こそ人間の生に固有な眞實なものであつて、哲學や藝術が、ヘーゲルのいふやうに顚倒された世界にあるといふのは、日常の巧利的な常識の世界を覆して、人間の本性について思惟したり、それを形象的に表現して美とするためにほかならない。笑はこのやうに日常的な生活が本性的なものによつて顚倒せしめられるところにその最も正しい意義と美とがあるのである、と考へられるのである。

しかし乍ら、通常、笑が誘發される場合を考へて見ると、その最も原始的な且部前的なものとして現れるのは形の上における滑稽であらう。例へば奇矯な身振りや、見なれない服裝、馬鹿々々しい動作などがそれである。しかしそれはチンドン屋の身振りや服裝が誘發する笑が說明するまでもなく低級であると同じ樣に、美の形象としては最も下位に位するものと云はなければならない。その次には言語が表現するところの滑稽卽ち言葉のもつ可笑味が考へられる。これは第一のものよりは進步したものと見られ、例へば地々、しやれ、語吾合せ、聞き違ひ、云ひ違ひ、誇張或は誇少等が數へられる。現在行はれてゐる漫才の面白さは主として、この言葉の滑稽味を放つたものであるといふことができるのである。けれどもこの言葉のもつ面白さもたゞそれのみに終始する限り結局はナンセンスに墮さざるを得ないであらう。機智や諧謔を手段とするものであるがそれが單に言葉のあやとしての面白さに止まるならば何等人生の眞實にまで觸れて來る迫力を持つことができないからである。更にこの身振りと言葉の滑稽に加へるに事件を主として事件の持つ可笑味を迎ふ笑がある。いはゞ動作（ハンドルンク）の持つ錯誤を手段として笑を誘發しようとするもであるが、これもたゞ單に笑はせるための手段であるならばその動作が錯誤であつたことが判明すれば、その瞬間可笑味は消滅してしまふことを避けることは出來ないのである。

現代の商業劇場で上演されてゐる大部分の喜劇の持つ面白さは以上に擧げたやうな身振りと言語と動作の錯誤に出發する笑をその內容としてゐると考へられる。しかしそれが單に笑の爲の笑を導き出す外面的な形成的な手段として止まつてゐる限り、何等人世の內面的な眞實を表現し得るものとは考へられないであらう。人々は劇場の中においては大いに笑ひ、一度び劇場の外に出た場合、忽ち何故に笑つたのかを忘却してしまふ程の無意味な無內容な笑であるといはなければならない。それならば最も高級な笑とはどのやうなものであらうか。それは單に身振りや言葉や動作に發するものでなく實に性格の根源的なものに根ざす笑でなければならないのである。藝術は窮極の意味においてある個性の表現と考へられるが、典型的な個性この場

合個性とは個人的なもののみではなく集團的な個性もそれとして考へられる、充分に眞實性を持つ個性が描かれ、その個性とそれをとりまく環境との不一致、錯誤から誘發される笑こそ最も洗練された笑であると考へられるのである。悲劇は通常ある偉大な個性がそれをとりまく環境と闘つて崩れ落ちる姿と解されてゐるが、劇は凡庸な個性、卽ち偉人や帝王や美姫や權力者でなく、商人や百姓や學生やサラリーマン等のありふれた人格、而もそれは血と肉とを備へた生きた人間である限り、それぞれに眞實に接近せる個性をもつものであるのだが、そのやうな凡庸な人々が環境と闘つて敗れる姿と考へられるのである。凡庸な人格が典型的な眞實性をもつて描かれるとき、卓れた美の形象となり得ると同時に、最も高級な滑稽の感情が誘發されるのである。その最もよき例證は名匠モリエールによつて描かれた「人間嫌ひ」(ミザントロープ)のアルセストであらう。

三

喜劇はその表現の手段として諧謔、機智、揶揄、皮肉、諷刺等を持つてゐる。これらの手段を考へて見ると、そのいづれもがすべて批評的精神に發してゐるものであることが理解される。例へば皮肉にしても諷刺にしてもすべて對象に對する何等かの攻擊的な態度であるといふことができるのである。諧謔にしても機智にしても對手の愚鈍や無智を曝露するか、若しくは自己の有能を踏晦するときに用ひられる手段であるのである。

嚮に喜劇は凡庸な人格が環境と戰ふ葛藤(コンフリクト)のなかに生れるといつたが、この皮肉や諷刺や機智は弱少なものが强大なものに對するときには極めて有力な武器となり得る手段であると考へることができる。それゆえ自己をとりまく環境或は現實といつもいゝ、に對して戰はんとする人々がこのやうな武器を手段とする喜劇を喜び迎へるのは當然であらう。皮肉(イロニイ)や諷刺(サタイヤア)を哲學的に考察すれば皮肉は自己より弱少なものに對する攻擊であり、諷刺は自己よりも强大なものになる攻擊であつて、いづれも對象と自己との間の疏隔の感情によるものであり、たゞフモール(有情滑稽と譯される)のみが對象と自己との合一的な融合を果す最も高級な笑と考へられるのであるが、現在にあつては、この混亂した現實、人々を壓迫し、生活を不安ならしめてゐる現實に對してはこのやうな合一的な融合を意圖する笑は尙求めることは不可能であらうと考へられる。

四

以上において筆者は現在に喜劇が求められる理由を考察し、次いで喜劇の本質についての若干の豫備的な分析を行つたのであるが、さてそれならば現在行はれてゐる多くの喜劇をわれわれはどのやうに理解すべきであらうか。

現代の喜劇を大別すると、大劇場において上演されてゐる娯樂喜劇と、淺草、又は千日前等における小劇場的な娯樂喜劇とロツパ、エノケンの特殊喜劇と、ムーラン・ルージュ、及び吉本系の小劇場に上演されてゐる所謂新喜劇と稱せられる新しい

性格をもつものとが數へられる。

その中大劇場で上演されてゐるものは主として二番目物を狙つた觀客の氣分轉換の爲の單なる娯樂的な笑ひを、殆んど無意味な可笑味を提供するためのものであつて、その中には全くといつていゝ程の社會に對する批評も人世の病弊についての抉揚も、歪んだ道德に對する諷刺をも見ることは出來ない。多くは響に云つた言葉や身振りのギャグを使用したナンセンスな無理强ひの笑を無內容に展開するのみであつて、少くとも笑のうちに考へさせる部分、即ちわれわれの洗練された教養や、磨かれた理智やナイーヴな精神にふれ得るものを見出すことは殆んど困難であるとさへ云はなければならないやうなもののみである。たゞ僅に曾我廼家五郎のみが家庭のモラルに觸れた、人情のペーソスに迫らうとする特殊な世界を表現し得てゐるが、しかしそこで扱れてゐるモラルは現代の青年や新しいジェネレイションに訴へかけ得る程の淸新さをもつものではなく、いはゞ舊意識的な孝行主義や家庭平和主義や事大思想に凝り固つた常識の世界であつて興行的には成功してゐるかも知れないが藝術的に高く評價され得べきものではない。

淺草、千日前の小喜劇は現代喜劇のうち最も低級なものといへるが、それらはたゞ娯樂としての笑をのみ目標とし、教養の低い觀衆を狙つたものであつて、將來どのやうにも發展性を持たないものである故問題とするには足りないであらう。

たゞロッパ、エノケンの二座が淺草的雰圍氣の中で新しい相貌をもつて新時代に働きかけようとしてゐる事は注目される。二者共に多くの音樂的要素をとり入れ、スピーディな舞臺轉換と嶄新なコステュームとによつて若い年代の觀客を動員し、殊にロッパはサラリーマン物を主要な演しものとして丸之內一帶のインテリを觀客としてゐる事は若干の問題性を孕むものと考へられる。

しかし乍ら、エノケンが最も得意とする藝が猿の眞似である事によつても知られるやうに、そこに表現される滑稽はイロニィでもなくサタイヤアでもなく、ましてやフモールの世界でもなく、たゞ笑の最も原始的な形態である身振りの可笑しさ、言葉のキャグ、又は動作の錯誤によるものであつて、性格や個性や、現實に對する批評や諷刺のもつ鋭い面白さは見られない。ロッパ一座も音樂と舞踊との積極的な參加によつてある種の淸新さを把持し得てはゐるが、その本質においてはエノケンと何等異るところはないのである。

現代の喜劇において最も將來性を有つものは新喜劇の一派であらう。新喜劇は何よりもインテリゲンチアを觀客としてゐることによつて他の喜劇に比して特に優れた精神性をもつてゐる。そこに扱れてゐるテーマは家庭における新舊の時代の衝突や、モラルの批判、生活苦に對する社會的觀客からの考察、現代のモードに對する批評等、それは多くの現代的なものを含み、批評に發する喜劇的精神の片鱗が、時には非常な成功をもつて、時には自嘲的な弱さをもつて表現されてゐる。そしてこの一派の勢力は高等劇場界に確乎たる地歩を占めてゐるといつても過言ではないであらう。

しかしこゝにも問題がないわけではない。その扱つてゐるテーマは今も云つたやうに、現代の精神にふれるあるものを持つてゐる。けれども新喜劇一派のもつ弱點はその取材の狹少性、即ち殆んど都會生活のある特殊な生活層、例へば大學生、失業インテリゲンチア、レヴヰウガール、女給、サラリーマン等に限られてゐること、勇敢に社會批評を試み乍らその見解が公式的であり社會の病弊の根源的なところまで徹底してゐないこと、人物が殆んど類型的であつて、個性的な眞實性が感じられないこと等が擧げられねばならない。更に舞臺的に云へば、上演の場所がムーラン・ルージュその他の小劇場に限られてゐるため、演劇的構成力において薄弱であつて、プロットの運び、演技法その他すべて散文的であつて、テアトラールな迫力を持たず、場面轉換が多過ぎるため、劇的印象が甚だ散漫であつて、すべてを言葉によつて解決しようとする欠陷、即ち漫才に近づかうとする風な短所を持つことが指摘されるのである。

この新喜劇のもつ喜劇的精神が大劇場的形式によつて生かされ發展せしめられるとき、初めてわれわれは正しい意味での藝術的な喜劇に接することが可能であらう。しかし乍ら當事者達はいふかも知れない。社會的な諷刺や、個性的な鋭さをもつ喜劇の上演は現在ではある壓迫によつて殆んど許されて居らず、また大劇場に集る觀客はそのやうに高いものを求めてはゐない。

たとへ現在の狀態がさうであるにせよ、この狀態をこのまゝに放置しておくことは演劇の退歩や廢頽をこそ意味すれ、進歩も發展も望み得ないものであることは云ふまでもないであらう。大衆はそれ程愚劣ではない。利得のために愚劣なもののみを觀客に與へることは、逆に淸純な大衆を愚劣に導き、ひいては文化を破壞するところの怖るべき惡德を犯すものといはねばならない。たとへ現在において政治的な意味で作家は徐々に制約を受けてゐるとはいへ眞に藝術家の名に價する作家であるならばその自由の爲に戰ふべきではないであらうか。そのやうな壓迫こそ喜劇的に諷刺され、笑殺されなければならない素材でもあるとも考へられるのである。

既に大劇場における正しい喜劇の成功の曙光は見えてはゐないであらうか。例へば前進座、井上一座における三好十郎の作品の成功や、新國劇における「勳章」の好評などその一つの證左と考へることはできないであらうか。新しい喜劇はまさにこの線に沿つて發展せしめられなければならないと筆者は考へるのである。

（三七年六月一日大阪にて）

芝居の研究雜誌

道頓堀

一冊　三十錢
一ケ年　三圓三十錢
送料共

路傍の石

四幕

場所は地方の或る町。時代は恰度日露戰爭の起る前年。露西亞といふ大敵を前にして大人も子供も皆強い覺悟に燃え立つた頃。其時代を背景とした薄命の、しかも其運命に對して強く淸く闘はうとする母子の物語りです。

序幕――高等科二年の吾一達の先生次野は。修身の時間に今祖國が際會してゐる重大な危機に就いて說いてきかせます。正義を護る國は負けてはならない。强くなくてはならない。何負けるものか、精神一到何事か成らないことがあるものかと烈々の意氣を吹込みます。さうした後で今度出來た町の中學校に入る希望者をたづねます。吳服商の倅麻太郎は一年落第した程の成績不良の子です。吾一は組の總代です。然し吾一の家は母と二人暮しです。吾一は中學その母は家主稻葉屋の同情を享けて封筒張りしてゐる有樣です。吾一は中學を諦めてゐます。けれど皆には負けたくはないのです。その負けぢ魂が友達との張合から汽車の通る鐵橋の下にブラ下がつてみせるといふ約束をさせてしまひます。

麻太郎の妹で、吾一や麻太郎と同級のおぬいは女の方の總代で吾一とは友達から何かといはれる程の仲よしですが、そのおぬいや親友の鏡造も止めますが、吾一には人の出來ないことをして、貧乏な爲めに輕蔑するみんなを押へつけたい心もあります。吾一はみんなの前で事實鐵橋へブラ下がりました。汽車が走つて來ました。

二幕目――吾一はたすけられて驛長室にねむつてゐる。母親のおれんや忠助、次野がかけつけて來ます。

吾一の父親は十四五年前生命保險の勸誘員として此の土地へ來てゐた男でその常宿の娘おれんと出來て吾一をもうけたのでしたがおれんの家は破產し庄吾―吾一の父―は東京で後家さんと一緒になつてゐるとかで、妻子を見向きもしません。

おれんの封筒張りだけでわずかに暮を立てゝゐるのです。

吾一は優秀な生徒で、中學校に行きたい希望をもつてゐるのですが、貧しいので望めないのです。そんな少年の感傷、いらだゝしさがこん度の冒險に

なつたのです。

本來ならば、汽車を止めたりしたので罪になるのですが吾一の心のあはれを驛長は知つて、自分の責任にするから歸つていゝ、と云はれてゆるされます。

泰吉の内では次野、忠助、泰吉とこんどのことを話してゐます。中學に行かれないためなのだから中學にやらさうと泰吉は云ひます。が、次野は世間の口がうるさいと一應とめますが、泰吉の純粹な心を知つて、同意してゐるとおれんがやつて來ます。

おれんは補助をうけないで小僧にでもやります、と云ふけれど、泰吉や次野の言葉に子供の將來を考へて同意します。

吾一も大喜びのところにおれんの亭主庄吾があらはれて、泰吉の親切を曲解して『餘計なお世話はやめて貰ひたいと言ひます。

三幕目――吾一は高等科二年を了へて伊勢屋の小僧になりました。庄吾のきめたことなのです。

吾一は名も五助と改められ、古參の小僧仲間からはいぢめられ、番頭達からは屈辱を強要されます。然しそれは學へ通ひ、おぬいは東京の女學校へ行くといふのです。

負けたくない！

吾一は呉服屋の小僧の仕事に身が入りませんでした。唯々中學へ行きたい勉強したいと思つてゐました。

おれんは吾子をはなし、獨りで暮しながら内職をつゞけてゐました。吾子が戀しくなると吾一の主家の廻りを毎日通つてみるのでした。おれんは吾一可愛さで一杯なのです。吾一も勤めの辛さを思ふとき、母親一人が戀しかつたのです。

四幕目――おれんは生活に疲れ、惱みに勞れて倒れました。泰吉はおれんを入院さしました。泰吉の限りない同情、それをわからぬおれんではありませんでした。おれんは苦しんでゐました。ところへ又も町へひよつこり歸つて來た亭主の庄吾が病室に姿を現しました。入院の拂ひをしに來てくれた泰

御親劇には特に

新發賣　鶉せんべい　を

御推奨申します

瓢亭食品

優美罐入　送料共　一、二〇

小僧としての甘んじねばならぬ境界でした。

吾一の同級生の麻太郎、おぬいを坊ちやん孃さんと言はねばなりませんでした。

しかも出來なかつた麻太郎は町の中

吉とおれんの二人を見て庄吾は、いよ〳〵おれんを疑ひ、泰吉に無禮の言葉を吐きます。おれんは遂に自分の態度を決するときが來ました。

おれんは病室を飛び出します。

『アツ、患者さんが川へ飛び込んだ』

といふ叫び聲がします。實直そのものゝやうな哀れな女おれんは死ぬより外になかつたのでした。

おれんの死體がみつかりました。吾一は死體にしがみついて泣きます。泰吉も忠助もどうなぐさめようもありません。

父の庄吾がやつて來て惡態をつくので、親でない子でもないと怒り東京に出て立派な人になつて、みかへしてやると泣きさけぶのです。

母を失つた吾一は東京へ出ることになりました。忠助のはからひでした。求學心に燃えてゐる吾一を、せめて東京へ出してやつたならと思つた忠助は東京から來た洗張屋の京屋の手に渡しました。

吾一はどんなに嬉しかつたでせう。麻太郎に負けるものか、おぬいに負けるものか、きつと勉强して偉くなつてみせる。

次野先生のゐる東京へやつと行けるんだ！

然しその東京へは、汽車にも乘らず荷物を背負つて、京屋の後についてあるいて行くのでした。

京屋はまだ方々の町や村に寄るといふのでした。

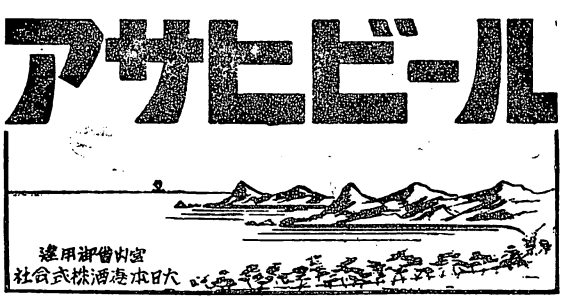
何時東京へ着けることか。本當に東京へ行けるのかしらとさへ吾一には思はれました。

でも然し、一歩々々嬉しく思はれました。

苦しくとも悲しくとも……吾一には死んだ母の顏が思ひ出され、次野先生に言はれた言葉の一つ〳〵が考へられました。しつかりやるんだ。

なつかしい町のはづれです。

汽車の笛をきゝながら、夕闇の底を吾一は京屋についてあるいて行きました。



特輯 讀物

天勝師匠 樂屋訪問記

一問一答

五月雨のそぼふる一日、天勝師匠を南座の樂屋に訪れる。折からの雨に煙つた東山一帶の風色が、まるで薄墨で刷いだその昔の名幅そのまゝの典雅さを湛へて、樂屋の直ぐ向ふに横たはつて見える。その落着いた情景の前に、何時迄も歳を知らない若々しい天勝師匠の容姿が、艶麗に浮び上つてゐるのであつた。それは恰も雨の日の溫室に咲くダリヤの風情とも思はれた。

——天正師匠から讓られた奇術にはどんなのがありますか。

——師匠から讓られたのは大低日本奇術で、私はそれに西洋奇術を勉強致しました。私は師匠に十七年間お世話になつて居りましたが、昔の修業はそれは大變、最初はハンケチ廻しだとか蒲團廻しだとか、日本奇術の『夕涼み』『蝶々』と云つたものから教へられます。それから私達の間では『のべ』と云つて居りますが、お芝居でやる蜘蛛の糸ですね、あれを隨分稽古させられたものです。あれは全く何でもないやうですが、中々遠くまで一直線に飛んで呉れない。たいていの人がおやりになると途中から型が崩れて終ふ、板の樣にマツ直ぐには飛ばないものです。ですから、私達若い頃には、『のべ』の手腕に依つて、その人の修業の程度を評價した位なものであります。私はこの『のべ』に三年かゝりましたね。

——現今でもお弟子に昔の樣な稽古法でお仕込みですか。

——現在は奇術を志願する子供がなくなりましたね。それに今ではどうしても奇術專問で舞臺に立つことが出來なくなりまして、ダンスの稽古もしなくてはならない、お芝居もやらねばならないと云つた具合ですから、みつちり奇術を勉強することが出來ないやうな始末です。

——日本の奇術では矢張り水藝が大

物でせうね。

——そりやア水藝です。今では水を使ひ分けるなぞ申しましても、水道でやるんだと簡單に判り切つたことゝして、一言に片づけられて終ひますが、昔の人には隨分不思儀がられたことは勿論で、非常に尊重された奇術なのです。

——考案されたのは誰方ですか。

——一蝶齋何とか云つた方と聞かされました。しかし、水を轉々と彼方此方に遷しかへる事を工夫しましたのは天正師匠で、その當時の西洋醫が使用してゐた聽診器のゴム管からヒントを得て考へたのでしたが、御存知の通りその頃はゴムが今日程に普及してゐないので、隨分高價なもので御座ゐました。で、全部をゴム管にすれば迚もお高くつくので、筆の軸をゴムでつぎ合せまして、ゴムの節約をしたと云ふことを私小供時代に聞かされたことがあります。

——たくさんなゴム管をお使ひになるのですか。

——私だけでも四本使つて居ります一番六ツかしいのは水に高低をつけることで、自分の手先きの命ずるまゝに水に高低をつける。これが仲々厄介です。然しお蔭で水藝だけは他の方と負けないだけの自信はあります。然し師匠のやられた『千筋の水』だけは私にはどうしても出來ない。これだけは殘念でなりません。

——先月新派の花柳さんが『瀧の白糸』を演られまして、水藝の件りでゴム管をバラして終はれたが、あんなのは困りますね。

——エ、、あれには私も注意したのですが、芝居の行きがゝり上、あの場合ゴム管なぞに關つては居られないと云はれて、それには私も弱りました。

——工夫された數々の奇術の中で一等大物は何ですか。

——四年前私の隱退興行の時に演りましたワンダー・ワールドと云ふのでこれは數十本のニツケルの棒を出入りの出來ない樣に舞臺に並べます。その間を私が自由に出這入りする奇術ですが、これなぞは大物でせう。

——舞臺でお客樣に種を明して終ひたいやうな氣持になられることがありませうね。

——そりやありますとも……。舞臺で簡單に演つてゐる奇術でも、工夫をするとなれば大變です。どうにかして私の工夫した苦心の跡を知つて頂きたい。これには種明し以外にはないのですからね。種明しをすれば屹度お客樣は成程と感心して下さることは必定です。私は此の前の隱退興行の時、今迄に自分の演じた代表的なものを全部種明ししてお目に懸けやうと決心しましたが、他の奇術家の方へ影響する

ので思ひ止まりました。今度の出しものゝ中で、二代目の演じて居ります手足がズーツと伸びる奇術がありますねあれなぞ後ろから御覽になれば吹き出してお終ひになりますよ。

――私は奇術は道具を使つてやるものより、手先きの修練で見せるものが面白いと思ひますが……

――そりや本眞に味もあるし、その方が六ツかしいんですがお座敷藝で、舞臺では損をします。

――近頃よく玩具屋で奇術の道具を色々と賣出して居りますが、矢張り影響するでせうね。

二代目天勝孃

――イヤ返つて私は奇術の面白さが一般に普及されて結構なことだと思つて居ります。あの道具を買つたからと云つて決して奇術は巧く行くものではありません。仲々巧く使ひこなせないそれを天勝はどんなにあの樣に巧く扱ふのだらうと云ふ興味で見に來て下さるお客樣も隨分あります。

――奇術を奇術としてだけではなくして、お芝居やレビュー等に奇術を採入れて演れば隨分面白いものが出來ると思ふ。そう云つた新境地にこれからの奇術は進むべきでせう。

――勿論私もそれを考へましてドシドシその方面を開拓したいと存じて居ります。現に今演じて居ります『峯の櫻』は踊りに奇術を加味したもので、此の春病床で編み出したものです。スツカリ出來上つた時の嬉しさは格別なもので、そうなると私の性質としてオチオチ落着いては居られない。幸ひ三越で私の踊りの師匠の會がありましたので、飛入りで發表させて頂きました。あれなぞ全く手先きの仕事で、身體に八十枚のニツケルの花を隱して踊るのですから相當な重味があります。然し先日もさるお客樣にあの木は松か柳かと問はれた時にはウンザリしましたね……

――觀識のない方には一番困る。松や柳に花の咲く筈がないではありませんか……。處で失敗談なぞないでせうか？

――滅多に私は失敗をやらない。と云ふより失敗をやつても決してお客樣に、私の失敗は知らせた例がありません。私は外國に居ります時に腹話術と云ふのを勉強した、これは唇を動かさずして話をする方法ですが、これがたいへん舞臺で役立ちます。お客樣から御覽になると判らないが、舞臺では色々な事を云つて指圖してゐる。これ

は私の自慢ですよ。然し先日滿洲で公演して水藝を演つた時には失敗でしたね。寒さで水が凍つて終つて、エイッ！と云つても少しも水が上つて呉れない。これには私も參りましたよ。まア直ぐに湯を入れて、ヤッとのことで急場を繕ひましたが、水が出るまで舞臺に穴をあけない樣にとの苦心たらありませんでしたよ。

——今後の御腹案はありませんか。

——私は五十になつたら舞臺から隱退しやうと決心して、先年隱退興行を致しましたが、私の名跡を二代目に讓ることになりましたので、その襲名興行に今一度舞臺に立つことが出來ますので嬉しくてなりません。生來舞臺が好きなのですねエ。しかし今後隱退後は好きな奇術の工夫を樂しみに、二代目の爲に盡力してやりたいと思つて居ります。どうも奇術師と云ふものは掏摸と同じですよ。お客樣の方へはニコニコ笑つてお愛嬌を振り撒いて居りますが、その實手先きは絶えず何か仕事をしてゐる……

——來月は中座へ御出演ですね。

——えゝ、もう一度中座へ出演の望みが叶つて本眞に嬉しいんです。來月を樂しみに致して居ります。

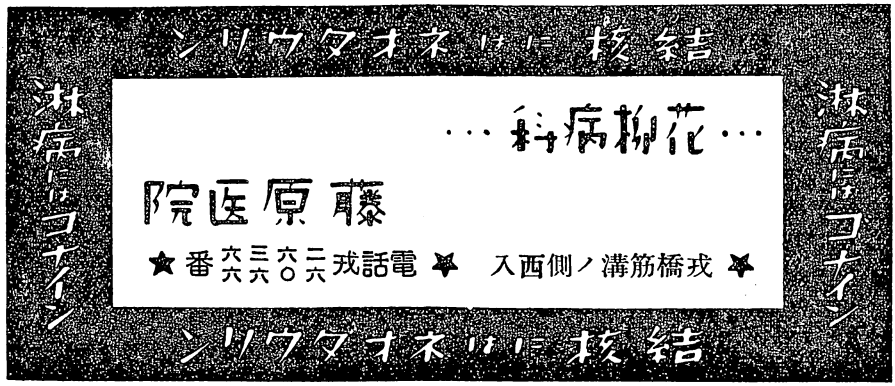
——色々面白いお話を有難う御座ゐました。では來月は大阪で……

と厚く禮を述べ、樂屋を辭して外へ出る。

四圍は既にトップリ夜の帳りに包まれて、四條通り一帶の電光が、雨に濡れたアスファルトの上に、金魚の樣に長く尾をひいて映つてゐた。雨は上つてゐたが、何とはなしに肌寒い宵であつた。

（五月二十七日南座樂屋にて）

文責・大橋孝一郎



芝居見たまゝ

女夫波（幕四）

歌舞伎座上演

女夫波　小春日和の鎌倉海岸。其處へ新婚の融と俊子が睦まじさうに散歩して來ます。彼と彼女は父の許しを受けての嬉しい結婚、續いて此海岸へ新婚旅行に來たので、色々と將來の事など語り合つて居ます。所へこれも意氣投合して今は夫婦になつて居る樟山と美津子がやつて來ました。四人の朗かな會話、海の眺めも夢の樣な美しさですが、やがて樟山夫妻が立去ると續いて現れたのは植村の姉時子と日頭の娘富美子でした。二人は俊子に對して散々に嫌味を云ひ、また植村には今度外國留學の命令が出た事を告げます。植村は不愉快になり俊子を促して此場を外してしまひます。後に殘つた二人、時子は頻りに富美子を慰め、やがては植村の心を富美子の所へ戻して見せると云つて居ると富美子を訪ねて來た中年の紳士があります。彼は日頭の片腕と頼まれて居る高嶺と云ふ男ですが、此の會合に依つて時子と道ならぬ關係を結ぶ樣になるのです。

出發前、植村の家です。融の外國出發がもう間近くなつたので、家内は其準備で忙しさうです。今しも融が歸つて來ましたが妻の姿が見えないので時子に尋ねると菊美の守をして市場へ使ひに行つたと云ふ返事です。菊美と云ふのは時子の子供なので、植村も少し感情を害します。時子はそんな事に關はらず、なほも言葉を繼いで俊子が一家の主婦として何の能力もない事や、出世の爲には妻や家庭など顧みず只管その目的に努力するのが立派な男子だなどと辯じ立てます。

姉に對して柔順な融は此の言葉に氣持を惡くしながらも表面立つて反對する事は出來ないので、今日は同級生が送別會をしてくれるから、五時には出掛けねばならないと話を變へるのでした。彼が奥へ入つた後で親友の樟山が

訪ねて來ましたが、時子は冷たくあしらひます。

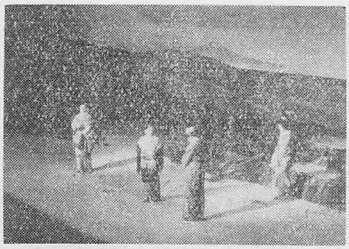
それでも融に會へた樟山は、自分は貧乏なため、第一番に參會すべき今日の送別會にも出席する事が出來ないと泣いて訴へるので、融は紙入ごと彼に渡し、どうか氣持よく使つてくれと云ひます。折柄、俊子が菊美を負つてかへつて來ました。其のいぢらしい姿を見て樟山はまた涙にくれます。融も遂ひに堪らなくなつて泣くのです。

二人の主婦　植村が外國へ行つた留守です。植村の家では姉の時子が權利をふるひ、俊子を虐待するばかりか高嶺との汚れた戀を樂しむ爲に役所から來る留守中の手當を浪費し、其上俊子の品物にまで手を付けて日夜みだらな生活、今日も何處かへ出掛けて居ます

俊子と女中のお竹が居るところへ酒屋の勘定取りが來ました。時子の高嶺が費す酒の代は相當の額になつて居るのです。俊子は樣子を聞いて見ると酒屋ばかりでなく、自分の着物まで質に入れて了つた事が判明したので、流石に呆れて質屋へ出掛けやうとする處へ菊美がボンヤリ歸りました。

見ると大變な熱なので俊子はビツクリして早くねかせるやうお竹に賴み、自分は急いで醫者の許へ走るのでしたすると玄關の方からは酒に醉つた時子と高嶺が入つて來ました。二人は長火鉢のそばへ坐つて、すつかり夫婦氣取りになり、高嶺は今にも大金が得られるやうに話をして時子を喜ばせます。餘りの態度に女中のお竹がふんがいして時子と言爭つて居る所へ俊子が醫者からかへつて來ました。時子は早速に喰つてかゝり、俊子に高嶺との間柄を意見されると、もうこんな家には居ないとて高嶺と二人で出て行つて了ひます。俊子はぢつと考へて居ましたが、菊美の爲にもう一度時子を家へ歸したいと決心し、菊美を抱えて時子と高嶺の後を追ふのです。

雪の道　冷い冬がれの木立が雪もよひの空に立つて居ます。日はとつぷりと暮れて細かい雪さへ見えます。高嶺と時子の二人は橋の袂まで來かゝりましたが、流石に時子も女で、殘して來た吾子、漠然たる未來の不安、などを思ふと何か賴りないものを感じるので高嶺に念を押します。此時、菊美を連れた俊子が走つて來て、時子に詫びもう一度家へかへつてくれと賴みますが時子は應じません。菊美は母になつかず却つて俊子に縋るので、高嶺は時子の手を取つて行つて了ひます



雪が一層はげしく降る中で俊子は天を仰

いで泣きます。

歳末風景　時子に去られた俊子は、一物もない家に殘つて途方に暮れましたが良人の歸朝までを強く正しく生きやうと健氣な心を定め今は城東にある樟山の佗住居に菊美と共に寄寓して居るのです。今日は大晦日で、此の貧しい家では主婦の美津子がミシンにかゝつて一生懸命に働き、其傍には家主がむづかしい顏で坐つて居ます。樟山の勤めて居た會社がつぶれ、失業生活を續けて居る爲、家賃さへ幾月も滯つて居ます……。美津子が米屋の勘定取りに言譯してかへすと、入れちがひに俊子が菊美の手を引いてかへつて來ました。彼女は菊美をこんな貧困の中に置くのが可哀想なので、今は立派に暮して居る高嶺と時子の邸へ行つて菊美を引取つて貰はうと出掛けたのですが門の前から戻つて來て了ひました。そうして此子だけは自分が育てると優しい心を打明けるのでした。此所へ、大きな風呂敷包みを背負つた樟山がかへつて來ます。

彼は金策に行つたが何處へ行つても思はしくないので友達から足袋を千足ほど借受け、之から此品物を賣つて借金を幾分でも返さうと云ふのです。家主も彼の氣持を知つて大に同情し、其足袋を全部買求め、其上家賃も待つてやると云つて呉れます。一同は感激して居ると、表に人聲がして橋見老人が訪れました。其の手にある新聞には俊子を中傷した記事が載せてあります。樟山は其の新聞社には友人が勤めて居るから直ぐに行つて調べてくると立上り、老人は今更ながら我娘を心から哀れに感じるのです。

清算の日　日頭家の一室、豪奢を極めた洋室に、主人の日頭武則と高嶺とが談合して居ます。高嶺が行つた不正事件が曝露しさうになり、累を日頭にまで及ぼす形勢に至つたので、日頭は高嶺の行爲の無節制さを非難して居るのです。書生が來て橋見弘光の訪問を告げます。日頭は不在と云へ、と言付けましたが、橋見老人は既に此部屋へ入つて來ました。其後には木劍を持つた英夫が從いて居ます。

橋見老人は日頭に對して其誤つた考へを正し、且富美子を呼ばせて例の新聞を突付ます。

富美子は知らないと白を切りますが生證據の鷹山が現れたので言葉も出ません。

鷹山は富美子に欺されて彼の中傷記事を書いたのでした。橋見老人は再び日頭に對し、此上は速刻植村を留學から呼び戻せ、そうして吾々に謝罪せよと說いて居ると、取亂した時子が入つて來て司法官一行の來訪を告げます。やがて後から判事が刑事を伴つて現れ刑事は高嶺に拘引狀を差出します。

春甦る　のどかな田舎の春景色、小川のほとりに橋見老人と樟山が釣糸を垂れて居ます。いつかの事件以來老人は俊子と菊美を吾家へ引取り、また樟山夫婦も田舎へ來て此老人の世話になつて居るのです。

やがて俊子と菊美がお辨當を持つて來て現在の生活の樂しさなど語り合つて居る折しも美津子が東京からの手紙を持つて來ます。

樟山が開けて見ると、それは以前かれが勤めて居た會社の社長から來たもので、その會社が復活したから再び彼を採用したい、而も其人格に感じて專務として働いて貰ひ度い、といふ文面でありました。

樟山は雀躍して早速東京へ行く事に定め、老人に今迄の禮を云つて別れを告げます。

樟山と美津子が立去つて行くと、老人は物悲しい氣持になり、俊子も何がなし涙をこぼします。と學生姿の英夫が飛んで來て、兄さんが歸つて來た。フランスから歸つて來たと叫びました續いて植村融が大急ぎで歩いて來ます顏を合せた一同は沈默します。そして橋見老人は先づ、君が此のわしに會ふ

洋酒・食料品・罐詰問屋

株式會社　横山商店

創業明治五年

大阪市東區豐後町三番地

電話東94代表三八六五番

振替口座大阪二八四七番

て先づ第一に云ふべき言葉は、と植村に尋ねました。

融は、自分はパリーに居た時に恐ろしい病氣にかゝり、殆んど生死の程も分らない程になつた。

事件は丁度其頃に起つたらしい、そして病氣が治つてから伊太利に靜養中人づてのはなしを聞いて不安になり日頭先生に問合せ樟山にも賴んだが、先生からは返事がなく樟山は居所が分らなかつた、それで日本へ急いでかへつたが横濱には誰一人の出迎へもなく、直ぐに吾家へ歸れば全く知らぬ人が住んで居た。妻の名を呼んでも何一つ自分を迎へて呉れるものはなかつた。それから日頭先生を訪ねると疑獄事件で捉はれの身となつて居た。

其後友人に留守の内の一切を聞き漸くすべての事實を知つた。と物語つて老人や俊子に詫びました。

そして時子が前非を悔ひ己の罪をつぐなふ爲に自決したと語ります

是に於て橋見老人の心も解け、親のない子を育てるのが亡き人に對するつとめだと俊子に言聞かせ、融は改めて老人に向つてお父さん！と呼びます。

南地ホテル

繁華街に近く、交通至便
閑雅な和洋室！

◇モダン階上浴室新設◇

一宿 三圓
二圓半
一 額 一圓半

南地戎橋電停前

電話南四一四・四四一

「道頓堀」

年極讀者優待

一ヶ年……三圓三十錢
（送料共）
一冊……三十錢

投書募集

本誌には「俳句」「川柳」「漫畫」「似顔」「舞臺スケツチ」その他誌友クラブ或ひは愛讀者諸氏の投稿の頁がありますから、三三頁の規定を御覽の上、どしどし御投稿下さい。

編輯部は皆樣の御投稿を歡迎して居ります。

中座天勝特別興行上演

喜歌劇『血の樣な椿』

南部邦彦

血の樣な椿の咲てる山の麓に盲目の乞食夫婦がまだ一度も見た事のない世の中を樂しく想像して幸福に生きて居つた。處が村の惡戯者の人達が二人の乞食をおだて上げた。『お前達夫婦は揃いも揃つて立派な夫婦だ、王樣と女王樣の樣だ、其房々した髯、其馬の樣な髮の毛、世の中でたとひ樣のない立派な姿だ』と、二人は心から夫れを信じた、そして一度でも宜いから御互が其美しい面を見合せたいと語り合つてた。

◇

幾日かの後村の娘ヂネさんが、大慌てに知らして來た『聖者樣が御出に成る、其聖者樣は病人を癒し盲目の目を明けたり死んだ人を蘇生させたり、夫れは〳〵大變な騒ぎです』。二人の盲目は何處の地面に立つてゝゐゝのか分らない程恐れおのゝいて終つた。

村の子供達は花を散いて聖者樣を歡迎した、村の娘のヂネは聖者樣の裾にすがつて二人の盲人を顧みて下さる

『瀧蓮子』のこと

阪上勝芳

大阪に生れ、大阪に成育しつゝある關西新派に光彩を放つものは、女優陣の筆頭、瀧蓮子である。彼女のもつその特異の性格は、舞臺に反映して、獨自の味を生かせて好評を博しつゝあり、前途を嘱望されてゐる。

彼女は『築地小劇場』をスタートとして劇團新東京築地座と、新劇畑に成長し、昭和八年九月、雪洲一座に在つて、始めて道頓堀の土を踏んだ。それが大阪と彼女を奇しくも結びつける因緣となり、當時結成された關西新派劇團に參じ、爾來四年餘、着々として堅實な道を歩んで、彼女の世界を作り、押しも押されもせぬ道頓堀の女王としての地盤を築き上げた。

◇

その美貌と近代的な明朗理智とウキツトに富んだ洗練された演技、『空は青いぞ』の冬子、『花咲く樹』のエマ、『貞操問答』に於ける美和子、『線の地平線』に於ける奈津子等々、我々に與へた印象は忘れられないものがあ

様願つた。

◇

聖者様は二人の乞食を見た、そして盲目で居る方が二人には幸福で有と思つたが、ヂネは心から二人の目が明けらるゝ様に御願した、二人は初めて世の中を見た、第一とてつも無い大きな世の中に驚いた、そして又汚ない世の中に驚いた、最も驚ろいた事は彼等夫婦の慘めな汚ない姿で有つた、夫れに引代へてヂネの美しい可愛ゐらしい姿であつた、爺はヂネが婆さんで有つたのだと考へた、婆は又想像の附かない程汚ない醜悪な爺をまさか冊年も連れ添つた仲宜しの亭主だとは考へ附かなかつた二人は煩悶した、苦しんだ、離ればなれに成つた、又口を利いて見たが、ヤツパリ一緒に成べき二人で有つた、なまじ目が明いてるから不可ないのだと聖者様に御願して再び目を潰して貰つて元通りの平和に歸るが人のおだてには載るものぢやないと云ふ言を二人判然と分つた、そして人の口を避けて何人も居ない山の中へ這入つて行くと云ふのが此筋なのですが、

◇

初めつから終りまで諷刺で充たして有る積りなんです人生觀と云ふか哲學と云ふか、ゴツチヤまぜて見たのです、最も其諷刺を一つ〳〵味つて觀て下さらなく其素通る。近くは『雁が叫ぶ時』における妖艶なヴアンプにして、しかも、純情な人間性をもつたスマトラお久の名演技、正に彼女の獨壇場であつたと云へる。又、『良人の貞操』ではねえやに扮して、かうした少女役においても可憐な藝風をもつて立派にやりこなし得るを認識せしめた。

◇

五月は『朱と綠』の主人公、千晶で、その難解な役處にあつて、種々研究し工夫し苦心してゐた。映畫と違つて時間的にも制限されてゐる爲、脚本は省畧の上にも省畧され、千晶が戸山との戀愛におちいる說明が不十分であつたり、何故、瀨川の證人として法廷に出るに至つたかと云ふ心理描寫がなく、散漫な舞臺を引きしめて行くに苦勞したらしい。法廷の供述に於ける感情を生かせての熱辯には滿場を魅惑させずにはおかなかつた。

◇

映畫に於ける高杉早苗が、處女らしからぬ扮裝や動作に比べて、彼女はそうした點にも十分の考慮をはらつており、衣裳は勿論、凡てに細心な演出をし、さすがに彼女が關西新派の人氣者としての確固たる存在を明示するものがあつた。今度の『未亡人商賣』は、美貌をかせに未亡人と稱して餘り愛情をもつてゐない夫の畵を賣つて

りに見て頂いても結構なんです。

私が紐育に居りました時に何か芝居をやつて呉れと在留の方々に頼まれましてこれに二三の小品を加へて紐育の四十三街に在る、ターンホールで上演した事が有ました。勿論日本の衣裝を用ひてゞす、出演者は皆な素人計り正金の支店長三井の支配人だとか何々商會の主人公紐育で有名な高見ドクターも一役買つて出られました、現在大丸の常務の石本音彦氏が舞臺監督で大毎の外國課長をして居らるゝ福本氏も一寸役に出てホク〳〵喜んで居られた、御客筋は大した物でした。今の大統領ルーズベルト氏やロツクフエラー氏、兎に角日米協會が動いたのですから米國側の名士は大抵見物に來られました。入場料が一等が十弗、五弗、三弗、二日間で總上り高が、一萬何千弗とか聞ました。間もなくボストンに呼ばれました。其時は大分役者が替つて居ました、全部英語でやりました、目下同志社高等の和田利政先生が婆さんの役をやられ、大毎の福本氏が聖者樣を演ぜられた樣に記憶して居ります。

◇

クリミソンカメリア、米國で大成功をされた天勝一座の其少女連に由つて此度演ぜらるゝ事は、其處に一脈のつながりを感じて面白い樣な感じが致します。

生活してゐる中に、一青年と商賣をはなれての戀におちいるといふ新喜劇風なもので、演出の模樣によつては、この平凡な役も、案外彼女が自分のものとして、獨特の新解釋で面白い味を見せるのではないか、と期待してゐる——。

◇

彼女の本質を生かせるには『獅子に喰はれた女』の樣な、激情に口も利けない、思ひ切つて生一本な、號泣と嬌笑、そうした役處を與へる可きである。『ある夜の出來事』におけるクロデツトコルベールの强慢な金持娘が一ジャナリストの男性的な態度に次第に心境變化して我儘な內に純情な思慕の情をおさへきれなくなる樣な役處も彼女に適應してゐると思ふ。

◇

人としての瀧は、優雅な陰影をもたない、感情を露出して潑溂とした近代的なリコウな女で、ハツキリとした線をもつてゐる、それが瀧の良い處であらふ。而し、才女は才に溺るの例へもあり、餘りにリコウすぎては危險である。

彼女は不滿も野心も一切を捨てゝ、君を支援する我々道頓堀人に、失望を與へぬ樣、ひたすらに藝道第一に精進して行つて欲しいものである。

西　關一

りきりは

歳万ンセマミスは或

◇編輯長と小エンタツ

——キミ！すみませんが、ハリキリ・ボーイを訪ねて來て欲しいンですが

——僕がデスか、チトつらうまんな

——どうしてデスか

——鳴尾も淀もみんなハリキツテ、みんなもうノビキリボーイデスワ

——君、なんの話してるんですか

——あんた、なんの話をしてゐるんですか

——つまり、僕の云はんとするのは……

——競馬、つまりハリキリ・ボーイ、でおまつしやろ！すみません

——何がすみませんですか

——もう、チヨツと早うおましたらあんたの顏を馬なみにタテルンデスケド

——阿呆なこと、僕のハリキリ・ボーイといふのは關西新派の……

——競馬の好きな人に阿呆なこと、さう話を早廻しにしてはいけませんかな

——ユックリ、話はして居るんデスが、日本は近頃神風が吹きまくつて、ゐまつさかい……つい……

——ヨウ落ついて……

——落ちるのはフランスの飛行機デスがナ、これは大きい聲で云へませんがな、佛蘭西の大使にでも聞えると僕が困るデスからこれは内緒ですよ

——キミ！キミ！落ちついて死んだ父ンのことも、會社の借金もラムネの洋服代も、今朝電車のなかで拾うた穴のあいたパスのことも、すつかり忘れて、僕の云ふことを、ヨーク聞けよ、コリヤ！青よ！

——それやつたら、又馬デスワ

——いや、こりやスミマセン早い話が、早い話が……

——早い話が、早い話が、家庭劇の市田ハンでスワ

——君にはドナイニ云ふたら判るんデス

——あんたの話はドナイニ聞いたら判るんデスか

——つまり、早い話が關西新派のハリキリ・ボーイに逢ふて來たらエエのやがナ

——逢ふて、サインを貰ふて來るんデスカ

——サインはどうでもえゝのや、おもろい話を、ノロケでも何でも聞いて來たらええのやがナ

——左樣ならば編輯長、どの

新派 ―― いろは

松竹亭小エンタツ

……チョンと木頭、道具が廻りや、綺麗な、綺麗な、艶メイタ、茲、角座の楽屋でアリマスワ（多少の修辭學的誇張のアルのを許して下さいね、スミマセン）

ハイキングとハイク

◎笈川武夫の卷

――笈川先生、御機嫌はイカガでおまつか

――やア、小エンタツ君

――何んぞ、こう、おもろい話おまへんか

――話てものは有るとか無いとか云ふもんぢやなくつて、話はするもんぢやナイデスカ

――濟みません！

――それツラツラ現在の社會情勢を憶ふに、松竹と東寶は揉めるし、南地にも新檢番がデビユウするし

――あんまり難しい話になるとイケませんがナ、わからんですがナ

――いや、これはキミを唯オドカスだけだ

――ソラ、殺生ナ

――近頃、僕等はハイクですよ

――俳句？古池や蛙飛び込む水の音、こいつですか

――違ひます、俳句もやつてたんです、が最近は俳句變じてハイキングとなつたんです

――電鐵とタイアツプですか

――キミは、直ぐ職業意識を發揮し過ぎるから、そんなに欠食兒童のやうに痩せるんだよ

――すみません！

――何故、僕等が斯様な一大決心をしたかを申上げるならば、年々國民の體育は低下し

――左様です、僕の友人杉山サンも此間さう云つてマシタ

――杉山サンと云ふと？

――陸軍大臣の杉山サンデスワ、濟みません！

――僕の話に茶々を入れてはいけませんよ、つまり、紀元二千六百年には東京でオリンピックも催されるといふもの須らく國民は體を鍛えて

――アナタも拳闘の選手になつて――オリンピックの選手笈川サン、サインして下さい

――そんな變な聲を出しちや

――この聲を出すばかりに、未だに緣談が纏らんのデスワスミマセン

――何んの話でしたかね

――ハイキングの話ですわ

――さうでした、何故、我等がハイキングをやるやうになつたかは、笈川武夫の早起の

結果です

——と仰有ると

——某月某日、神戸湊川

——瓦センベイと楠公サンの

——違ひます、神戸唯一の演劇殿堂松竹劇場に出演の折、僕の眼が戸惑ひして、早くあいたんです、でフラフラと再度山へ登つたんです、それからハイキング、が一座の人々に傳染ちやつて、現在では中田サン、寺田サン、六條サン宮村サン、その他諸々の勇士が加盟して「我等の健康を取戻せ」てなことになつて、兎頭巴會といふハイキング團體が生れ、非常に會員が增えました

——笈川さん、ソレハ增える筈ですワ、何にしてもあなた方がやつてゐるのはバイ(倍)キングですから、スミマセン！

新派とシンパ

◎堀正夫の卷

——堀先生、景氣よろしうまつか

——不景氣で酒も飲めんです

——堀先生が左樣なことをノタマフならば、我々マンザイ氏に於きましては、水道の水も飲めんデスワ、そんなことは笑談だつしやろ

——實は禁酒、してるんですよ

——ヨウ云はんわ、堀先生こそ、關西新派のハリキリ男と思ふ人のみ思ふてゐるデワありまへんか

——それが禁酒はしてゐるし女には忘れられてゐるし、實際、キミ、エヽ人世話してんか

——阿呆らしうて、阿呆らしうて、あんた戀人何人あつたら、御滿足デスか

——濟みません！

——ぢやら〳〵した話はこれ位にして、ピンと來る話、アタマにピンと來る話、例へば「ギヤング」ものを演つて、あなたが白く塗つてパチンコをもつて暴れ廻る芝居なんかどうデス

——とてもいいですがな、近頃は餘り白く塗る役はおまへん、老け役に、敵役ばかりで

——怪しからん話デスワ、大松竹ともあらうものが、このハリキリ男堀

——キミ！キミ！君がそないフンガイせんでもよろしい

——然し、然しデスナ、私とあなたの暖き友情——例へばおデンヤ、今里まで行動を共にした……友情によるならば……

——それを言はれるとはづかしい

——あれを思ふと禁酒は嘘でおまつしやろ

——實を云ふと飲めるトキに飲んで、飲めんトキに飲まんのです

——心臟の強い話ですね、堀先生、あなたの心臟の強いワケ言つて見まホか、心臟の強いことシンゾウ・バーマネントと云ふデセウ、略して、シンパ——左翼のアレデハ斷じてはありません——シンパ、シンパ——關西新派デスワ、すみません！

次號の登場者

市川玉太郎さん

小波若朗さん

あらゆる
宣傳廣告

プロセス
美術看板製作

廣告商事社

◇迅速確實安價ヲ「モツトー」ヲシテ◇

劇場
演舞場
裝飾

營業品目

店頭裝飾　徽章
室內裝飾　造花
町內飾付　久壽玉
催物裝飾　花環
花簪

各意匠、裝飾、考案調製致シマス

船場一〇七〇番ヘゼヒ御電話ヲ…

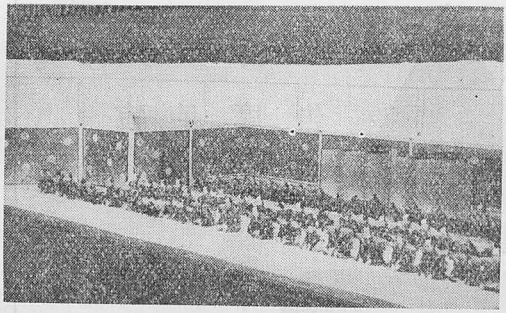
TRADE MARK

上村商店

大阪市東區南久寶寺町三丁目
電話船場(83)一〇七〇番・振替口座大阪二二〇七番

歌右衛門 追善の舞臺から

姉小路 孝



•A• 口上

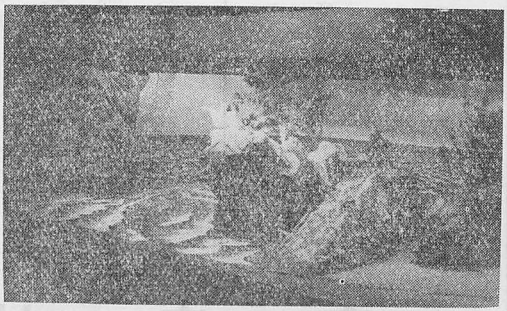
追善の口上場では歌右衛門が「私も一世一代と致しまして御當地へ御目見得致しました」と澄み切つた聲だが冷徹なあの名調子で述べた時が印象に殘つた。恐らく此の口上の一トくさりは將來何時までも私の耳朶に刻み付けられることであらう。

吉右衛門は令弟時藏の四人の子供達を紹介するに「みんなで八人居ります　が、この度は半分だけお目に懸けます」と例の愛嬌タツプリに述べて觀客を喜こばせてゐた。

福助と兒太郎とが可憐に歌右衛門のとなりに控えて、初お目見得の挨拶をした。

•B• 俊寛

俊寛は吉右衛門會心の作品である此人の持つあらゆる能力が最も高度に其能力を發揮する舞臺である。殊に只一人島にとり殘されてから幕切れまでの技巧には心服の外はない。

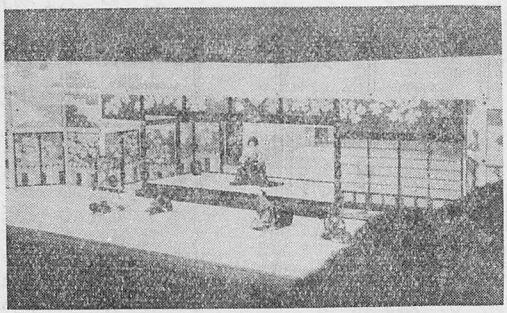


その舞臺裝置も歌舞伎座の大舞臺を縱横に使驅して一入芝居を大きく見せた。追善興行中での壓卷だつた。

•C• 辨慶上使

吉右衛門の辨慶は全て人形振りでかうした型本位の仕事にかけては第一人者の人だけに、齒切れのいゝ動

きを見せる。福助、梅玉は蓋し共に欠り役。但し、前半を省略した不親切さだけは難詰したい。現代人にはヤヽもすれば不可解な歌舞伎を、一そう不可解なものにするかゝる省略型演出は、歌舞伎の壽命を害すること夥だしきものがある。深き一考を煩はしたい。



（五月十六日撮影）

東西合同青年歌舞伎見物記

新橋柳一郎

五月の大阪中座は我當、勘彌、訥升、鶴之助らの東京軍に、扇雀、成太郎、珏藏らの大阪軍の合同青年歌舞伎で開けましたが、一月から五ケ月ブツ通しの歌舞伎は座としても重荷でせうし、俳優顔ぶれに格別の新らしさのないのも損なら、おまけに晝夜二部制と來ては俳優も見物もたまりますまい、晝の部の觀物は、「引窓」で、夜の部では「實盛」に「將軍賴家」でせう。

「引窓」は玩辭樓十二曲もの、亡父の型をうつして扇雀がやつてゐますが、昔のやうにゝ眞似が賣りもの〃とちがつて、近頃扇雀が亡父の當り藝をやるのに新らしい工夫のあとの見えるのはよいことです、こんどの「引窓」にもそれがいへます、隨所に見る新らしい工夫は舞臺効果をあげてゐますし、この人の進境を說明してゐます、成太郎のお早、秀郎の母親はともに手に入つたものですから樂々やつてゐます、小太夫の濡髮長五郎もわるくありませんでした。

「慶安太平記」は小太夫が初役で丸橋忠彌をやるのが賣り物です、萬事左團次の型でやつてゐますが、捕物となると得意のスポーツ的猛演で大向ふを喜ばせてゐます、伊豆守は我當がつき合つて舞臺を締めてゐたのはよろしい。

「ひらかな盛衰記」の源太勘當は我當の源太に、勘彌の平次ではチト役ちがひの感じです、我當の源太は努力は買ひますがも一つで、勘彌の平次はいつもの車輪です、錦吾の母延壽、訥升の千鳥はまづ〳〵といふところでせう。それに勘彌が彦七、鶴

之助が千早姫、珏藏が道後左衛門で「大森彦七」を出してゐますが、勘彌の彦七はあんまり感心しません、鶴之助の千早姫は一通りですが、珏藏の道後左衛門が存外よく出來ました。

夜の部に入つて「實盛物語」で扇雀が、いつかの「石切梶原」よりもいゝものを見せてゐます、例の瀬尾と腕を見ての極まりの型から、奚御前への物語の前後もよく、終りの太郎吉との別れまで隙もなく、終始熱演をつづけてゐたのは充分賞めていゝと思ひます、我當の瀬尾はこの人には無理な役で、むしろ小太夫に演らせた方がよくはなかつたでせうか秀郎の九郎助は手堅く、小扇の太郎吉がしつかりしてゐました。

「將軍賴家」は眞山青果氏の作で、賴朝が戀に盲ひて不慮の死を遂げたのを病死としてゐるのに不審を抱いた賴家の苦惱を描いたもので、眞山氏一流の手堅い筆でグン〳〵迫つて來ます、我當の賴家は後半ほどよろしく、勘彌の重保が好演で、前の大森彦七の不面目をとりかへした形です、鶴之助の小周防もわるくありませんが、訥升の尼政子にも一つ凜としたところがほしく思ひました。それに小太夫と鶴之助で「連獅子」があり、兩々相讓らず善舞してゐますし切の「江戸育お祭佐七」で、勘彌が市村張りの佐七を見せてゐますがこの優もいつまでも市村張りの芝居をやらされてゐてはどうかと思ひます、小糸は訥升でした。

青年歌舞伎もこの次は福助、段四郎、染五郎などを加へた大一座で來て、いゝものを見せてほしいものです。

五月の芝居往來

西尾福三郎

中座

樂屋へ行つて扇雀成太郎が仲良く合部屋に納つてゐる所で暫く話をきく。

何うしてかう入りが尠ないのでせうと云ふのに答へて、今月は大阪各座は申すに及ばず、東京の芝居も押しなべて似たり寄つたりの成績だと云ふ事、だからこれは演し物や役者の顏ぶれのせいではなく、大部分御見物の方の事情によるらしいと云ふ說に落ちて行く。

無論それもあるだらう。然し、幾ら巷が選擧の聲に充ち、外は好天氣續きの行樂シーズンに惠まれてゐた

所で、その爲に凡ゆる劇場が閑却されねばならぬと云ふ理由は成立たない。

今月なんか幾ら芝居月とは申せ、歌舞伎座と中座に同じ歌舞伎を然も双方共二部制で開けたのは一寸何うかと思はせる。殊に中座は正月以來歌舞伎劇の連續で、これでは見物の方も氣が變らないし、座方にしても月毎の客寄せの方法に策の施し樣があるまい。

忌憚なく云ふと晝夜を通じて總ての芝居に青年らしい熱が尠い。二部制による過勞、殊に扇雀成太郎は二座かけ持ちであるから、その點だけでも精神的な負擔が夥しい次第である。

通覽して貴の部では矢張り引窓が印象に殘る。小太夫の濡髮に妙な訛があつて一寸氣になつたが、それを除くと、全體が濁りのない上方調に包まれてゐたし、役者も床も揃つてよかつた。

慶安太平記は殺陣に小太夫の特色と同時にこの芝居の味とが認められる。堀端は妙に寸の詰つた感じで、その上默阿彌らしからぬ非寫實なこの場の構式が馬鹿々々しい氣がしてさうした突飛さを克服するだけのお芝居味をこの場面では見出し得ないと思ふ。

先陣問答は松島家のお家藝だが今の我當ならもつと派手な行き方をしてもよかつた。これはむしろ勘彌と役所を取換へた方がとかつたのかも知れない。

夜の部の方が遙かに粒の揃つた感じがする。

唯一の新作賴家で皆それ〴〵力一杯の藝を見せて、いかにも青年歌舞伎らしい活氣を横溢させてゐた點を推奬したい。

新作ではこれ程懸命になる人達が在來の物だと今一息熱が足りない事は前述の通りとして、連獅子にも妙に氣魄の乏しさがあつた事を否めない。

布引瀧も久々の物だが、扇雀我當共に恐らく初演の役所ではないかと思ふが、かうした芝居は一應結構であるが、あんまり有難いものではない。然し扇雀の實盛物語りの條りや我當の瀨尾の所々にシテの巧さ、ワキの良さを見せてゐた事を認めずばなるまい。

お祭佐七はサラリとした江戸好みの味が勘彌訥升鶴之助の活躍によつて娛しみ乍ら味へて、これが一番後味がよかつた。

今度は樂屋で東京方の俳優に會ふ折がなかつたが、また新秋九月に若手の芝居が見られる事と思ふが、次回にはもつと演し物を吟味する事とそして何よりも熱演を希望しておき

たい。

歌舞伎座

一世一代の歌右衛門、それにオール中村系の顔揃ひ、加ふるに先々代の追善とかく道具立てが揃ひ乍ら成績は今一と息の所だ。

肝腎の歌右衛門の演し物が春日局と淀君では正直の所どちらも氣が變らなくて面白くない。たゞ顔を竝べると云ふだけでそれ程實のある物ではない。

結局畫の部では俊寛、夜は松浦の太鼓、何れも吉右衛門に持つて行かれてしまつた形だ。

初めに福助が病み、終りに梅玉が病み、この所祟られ通しである。小室節は結極扇雀の小まんの芝居であつて一人幅をきかしてゐる。與作は梅玉の代役吉三郎であるから批評は遠慮しておくが、魁車の滋の井が松原の場へ被衣姿で出てくるが、これは裲襠の方が形も整ひ、大きくも見えてよかつたらう。かうした作品は理屈よりも見た眼で行きたい。

御所三は結極おわさの芝居になつてゐた。吉右衛門と云へばいつも大時代な窺屈過ぎる芝居をしたがる人とのみ思はれてゐるこの際、一つ位洒脫な世話物を竝べて、こゝいらで樂々と肩の凝りをほぐさせるやうな趣向があつてほしかつた。

俊寛や松浦は各地で試驗濟みだから改めて評には及ばず、刷毛ついでに道成寺に及ぶと、無慘なる哉傷だらけで、折角福助が由緒に因んで懸命に務めてゐるのに、夜の部は出つつぱりの然もドン尻りの事とて、あの體でこれ一つだけでも大ていぢやないと思へばそゞろ同情もしたくなつてくる。

舞臺と棧敷

森　あき子

おとうさん謂ふ所のステツキガールは、高安先生、木谷先生、食滿先生など大家がお揃ひの棧敷の中へ、計らずお邪魔して、御一緒に見物させて頂けたのは、本當に思ひがけない、そして何といふ仕合せなのだらう。

「歌舞伎若人」の皆さんの熱、元氣力强さが、舞臺から客席へと流れ出て、場内に躍動する。私はその躍動する波の中に浸つてゐる。舞臺は今

「ひら假名盛衰記」

「源太の着附が變どすな」

「ふん、狐忠信や……」

「あたま(鬘)のせいやろか？」

「あれな、それ、後のあれが有らし

めへんやろ、そんで寂しをすのンや」

舞臺に引き附けられてゐる私の耳へ、先生方のいろ〳〵のお話が聞えて來る。アヽこれは大變なとこへ來たなア。

「若手はやッぱり前進座のやうなものを選んで行かな損どすな」

「さうです、新しい物に歌舞伎物、それに新舞踊などもあつていいでせう。こゝには踊れる人が澤山ゐるんですから……」

「左様、東寶みたいな行き方でも宜しいですしな」

「でも、新しい物を選ぶのがむつかしいのでせうね」

「新しい物をやつていかな損や、どうしたかて競べられるしな。そりや下手なんきまつてんにやもん」

アレあんな失禮なことを……扇雀さんにしろ、我當さんにしろ、勘彌さんにしろ、若しもおとうさん達より上手なのならば、大成駒らは、故人松島屋さんは名人とは云へない理屈にならう。そりやア左團次さんが賴家をやれば世界一、猿之助さんが重保をやれば日本一。でも、でもあの勘彌さんの美しさ、若い故に一層迫つて來る哀れさ、それを考へてやつてほしい。このお二人始め、扇雀さんなり訥升さんなり、若い人達が釀し出すところの熱、元氣、若手でなくては出ない味、それを先生方が見てやらないで、たゞいけない所だけを探すのは、ちッと可哀想でせう

「今日の中で、何が一番宜しをした？」高安先生が私におききになる。

「將軍賴家です」

「そやろと思うた。熱演やつたしなア」

「きつとお祭佐七、いいと思ふんです」

「思うんですか……アハヽヽヽ」

先生は大きな聲でお笑ひになる。

大江の廣元で落着き加減を見せてゐた扇雀さんの實盛の、これはまた立派な出來榮えは嬉しい程。成太郎さんの小萬はむづかしさうな役。太郎吉の小扇さんもなか〳〵お上手。

「さいなら、御免やす」

「實盛」までで座談會へ行かれる先生方は、これからどんなお話をされるのかしら。また惡口かな。

先生方が行かれた後のガランとした棧敷の中に、私はポツリ取り殘された。でも、何だか本當にのんびり芝居見物の氣持になれて、勝手に舞臺に引き付けられることが出來た

それに芝居も大好きな勘彌さんの、「お祭佐七」なので。羽左衛門さんによく似ながらも、違つた味を出してゐる勘彌さん、スッキリした訥升さんの小糸、好感の持てる鶴之助さんの三吉——京都に着いても、まだ私の興奮は醒めなかつた。

どうして可笑しいのかしら……。

劇評　秋春

原田甲斐

三場

芝居見たまゝ

浪花座

伊達家の重鎭江戸詰奉行原田甲斐のかくれたる精忠錄、伊達家の根石を築くに於て安藝との勢力爭ひとなる。

第一場　酒井雅樂頭邸の奥庭

晩春の夜。雅樂頭の家老石田彌右衛門は家臣の氏家平六を膝近く呼びよせ、甲斐との對談の樣子をきいてゐる。そして我が意を得たりとするところへ家來の一人が、伊達家白石の城主片倉小十郎が訪ねて來たことを取次ぐ。原田甲斐が來るものと心待ちてゐた彌右衛門だが、小十郎が來るやうではいよ〳〵本舞臺になつて來たわいとほくそ笑む。そして用はと會つて聞けば、小十郎

「仔細あつて分家の伊達殿の子息が嫁女、即ち當御館の御息女、不緣としてお返し申し度い」とにべもない申入れだ。

理由はと聞けば、家風に合ひ申さぬ、本家の格式をもつておかへ申すのだ、と言切つて歸つて行く。

植込みの中から雅樂頭が出、

「不敵な奴め、仙臺にも人が有る喃」と云ふ

「御明察の通り、これは片倉奴が策略と心得まする。甲斐に劣らぬ鋭い男……」と彌右衛門。

ところへ甲斐が雅樂頭に召されてやつて來る。腹に一物を抱く雅樂頭は、表取高二千石まことに八千五百石ときいて、自分が肝煎りで直參に推すとも一萬石には粟粒も缺かすまいと甲斐をほめそやし、兵部は自分の遠緣のもの、何かと賴む、と言へば甲斐は先を越して「先日石田彌右衛門殿よりの內意を兵部樣に傳へましたら、今更ら甥の食ひあましを貰つて余生なき榮華に暮すより高野の奥に入り度い等と……」復命する、雅樂彌右衛門は得たりとばかり、

「兵部殿の心には裏の裏がある。分家の兵部を伊達家の主人に立て直す工夫をしてくれ」と、ズバリと言切る。甲斐も胸をすえて、

「いつぞやの話のやうに、一の關三萬石に本家の幾分を加へて公然の諸侯になす事は自分の考へでも出來るが、本家綱宗を退けて働くことは、奥州五十四郡を賭物にしても出來ない御所望とあれば酒井殿といえども見事敵にとつてみせるつもり」と言切る。雅樂頭はにがり切るが、話をかへて、先程小十郎來訪のことをとりあげ市正の嫁離緣の儀を正すので甲斐は驚き「國元の輩、自分の苦心も知らずさては仙臺にて籠城合戰の用意したか」と洩らし、天下の大事も蟻の一穴からくづれるもの——とジロリ石田らをみ、「かくなつては國元には歸れぬ、わづか奥州五十四郡伊達一家の忠奸善惡の名を謳はるゝよりは、せめて天下取りの御用に立ち度い、大惡無類の曲者と謳はれても武士の冥利」と雅頭の氣をひき小十郎の首とかけがへに、天下百萬石の墨附を約束して退去する。

第二場　酒井雅樂頭の屋敷

大手前酒井雅樂頭の表屋敷。伊達家一方の勢力、安藝、それから柴田外記、古山志摩ら坐る。

互ひに伊達家をおもふ存念であるが、安藝らと甲斐は離間の策に乘せられて相反目のかたちである。けふのお裁きも、本來ならば月番月中板倉の役宅であるべきを、急に大老家に御評定をうつされることになつたので、安藝らは、やはり分家兵部の手が廻つたかと、憂慮してゐる。そこへ遲參とけふの願ぼれ人

甲斐出頭する。

甲斐は金勘定の不審について訴へられてゐるのだ。

町奉行島田出雲守出て「今日の吟味役は板倉御老中、自儘の他言、願ひごとはなりませぬ」と注意するので

「手前願出ました伊達兵部は今日お呼出しになりますか」と念を押すが、島田は至つてあいまひに答へ、甲斐が論議封じの先手を難じると、そちは願はれ人だから安藝方から申掛けられた箇條を明白に申開きますればよいのだと、つき放すので甲斐はむつとする。甲斐は安藝の心を計りかね、伊達本家の事を氣づかひ焦燥して、石田彌右衛門に會ふと云ふが石田は所勞にて引籠中とて顔をみせぬ。甲斐は「九州原田の子孫ともあらうものが高が金勘定のために一國の者共より惡人姦物の名をうけるは心外、汚名をすゝぐためにも分家兵部と立合はされ度い」と頑張るが聞き入れられぬので、聲張り上げ、

「しさいあつて雅樂頭様の御懇志をうけるもの直々お願ひの筋あり」

とついに逆上せんばかりである。ところへ石田彌右衛門がかけつけ、聲を潜め、

「甲斐殿、お身は今のお座敷を死場所と決めてをられた、われ等は引籠つてゐても引くべき糸はひき、かけるべきワナはかけてをいた」

と謎めいた言葉を投げるが甲斐は耳をかさず

「お身まで一致して甲斐を退けやうとし、事を曖昧に致さうと云ふなら、甲斐は御列座の前にて御約束のお畳附を表立つて申し請はふか」とおどし、調子をかへて「甲斐でなかつたら、この國難を救ふ程の者はない、甲斐は金勘定の汚名のもとに退けられることはいやだ、なれども善惡共に御評定次第……」。

ところへ奉行島田出雲守、

「伊達家江戸家老原田甲斐出席なされませう」と呼び立てる。

やゝしばらくの後、遠き正午の時太鼓の聞える。突然奥の間騒がしく、口々に「無禮だ無禮だ」「控えい」など大聲に罵る聲におはれて、甲斐奥座敷よりつき出される。

「いやまだ言葉が殘りました。言上中に御座をお立ちなさる筈はない……」

「えゝならぬ御老中はも早やお席を立たれた」とゝりあはず、悲憤の涙に首を垂れる甲斐。

お膳部が出ると、酒井家の家臣が柴田外記と古山志摩を火急のお召しと呼び立てる。あとに甲斐は安藝にすりより

「敵味方の心をすてゝ、亀千代君の今後に、とくと御勘考はないか」と安藝の膝に手をかけるが安藝は

「我鬼め、何をする」とその手を打つ。

「原田の苦心もおのれ故に……」と甲斐さツと一刀を浴びせる。

大詰　酒井大老家の奥座敷

刄傷だ、狼藉だ、などゝ騒がしく廊下を走り違ふ足音。

と甲斐にせまられつゝ安藝は斬られた肩先を押へて

「小伜め、逆上したか、伊達家のためだぞ」

抱きとめんとする、

「御大老にも言分あり、板倉どのにも怨みあり、ましてや御家を滅ぼすのは汝の業だ」

安藝は遂に倒れる。

「板倉どのに甲斐見參せう」

そこへ外記「逆賊」とあらはれ渡り合ふが甲斐の刄鋭く、外記、蜂屋を傷け、尚も奥殿に侵入せんとするところへ、石田彌右衛門酒井家の侍達に下知して、「伊達家の者なら誰彼の容赦はいらぬ斬れ〳〵」と叫び、無疵の蜂屋を始め甲斐、外記、安藝等みな仆される。

そこへ板倉内膳正、島田出雲守、大井新右衛門、古山志摩その他靜かに出で來り、内膳は伊達安藝其他に逆賊甲斐の刀にかゝつて氣の毒におもふ、とねんごろの言葉をかけてをき、さて甲斐には小聲で、

「そちが肺肝をくだいての精忠は御大老にも心を動かされて、亀千代の家々は萬々不易、退轉の憂はないとのお言葉だ、また汝の苦衷に感じ、分家兵部どのには隱居を命じ、一ケ關三萬石はお召上げに相成る」

甲斐のからだ、やうやく動く。

「ただ憂ふべき一事は御大老に於ても何か思召さるゝ筋あつて、この際隱居のお望みなれど、これは内膳より改あてお思召止りを願ひ出る料見だ」との言葉に、甲斐は微笑み、

「御禮、御禮――」と落ちて入る。

松竹大船映畫
佐々木啓祐作品

「衣裳花嫁」

原作　林房雄
脚色　柳井隆雄
監督　佐々木啓祐
撮影　長岡博之

人物

古城三平　笠智衆
〃　俊子（綽名は女史）　高杉早苗
〃　環　榎芙佐子
宮木浩介　上原謙
佐分利平八　大山健二
紅林（綽名は男爵）　小林十九二
柏屋　坂本武
匹田鐵造　南部耕作
絹子（綽名は金坊）　東山光子
雨宮誠之助　岩田祐吉
〃　徹郎　德太寺伸
紅子　松井潤子
牧田先生

物語

水仙莊といふがあまり美しくアパートに三人兄妹がゐた。ビルデングに着色する塗料を研究してゐる兄の三平（笠）とピアニストにならうとしてゐる妹の環（榎）の生計を立てゝゆくのはダンサーをしてゐる俊子（高杉）といふ即ちこの物語のセロインである。

建築家の佐分共は、親友三平のために株屋をしてゐる學友宮木の事務所へ研究費の援助を頼みにゆく。宮木浩介（上原）は三平には自分の名を秘めることを約束して研究費を出すことにした。

宮木は或るダンスホールで舊友紅林小林に俊子を紹介され、その夜紅林に誘はれて宮木俊子その親友絹子（東山）の四人は待合へ上つた。宮木と俊子の間には次第に親しい感情が交流した。そして二人は其處に翌朝を迎へた外には絹子が朗らかに待つてゐた。

宮木は紅林に周旋料料を請求されて憤然と百圓札を叩きつけた。俊子が晴れやかになつたのも束の間、俊子は紅林から、取るべきいはれなき百圓札を差し出されて、激しい悲しみにつき落された。

環は先生の轉任からコンクールを控へて俄かにピアノの練習が出來なくなつた。俊子は妹をなんとかしてしてやりたい氣持から、この事を柏屋（坂本）といふ衣裳屋に相談した。三平の發明は遂に完成した。佐分利（大山）は工場を建て早くこの實行に着手せんと宮木を訪れたが、宮木の態度はがらりと變つてゐた俊子は何事かを覺悟して環を連れ、柏屋の世話で湖畔の別莊へピアノの練習の爲に出かける。

留守を頼まれた絹子は何も知らなかつたが三平の置手紙によれば俊子の避暑はたゞの避暑ではなく、又絹子と三平への優しい心遣ひでもあつた。湖畔の別莊では、キャンプの男女學生達が集つてダンス・パーテーが開かれた。意外にも俊子をねらつてゐた匹田（南部）の別莊であつた。その夜匹田は俊子に迫つた。……

宮木の株が大暴落を始めた。絹子は眞實こめて宮木に三平の研究費を哀願し、すべてが紅林の奸計であることを訴へたが既に事態は遲かつた。宮木は破産に瀕してゐた。今や事件の旋風は湖畔の俊子と、東京の宮木と二つの中心をなして急速度に高潮した。さてこの解決や如何？

松竹・大船映畫
佐々木康作品

「神秘な男」

週刊朝日連載

原作　吉屋信子
脚色　齋藤良輔
監督　佐々木康
撮影　野村昊

人物

津島龍一郎	上原謙	
土田(運轉手)	大山健二	
波多野權藏	河村黎吉	
港壽子	三宅邦子	
お房	出雲八重子	
渡邊(牧師)	西村青兒	
尾木耕作	坂本武	
規矩雄	水原弘志	
幸子	大塚君代	
大作	廣瀨徹	
萬里	若水絹子	
內藤	山田長正	
與太者		C
醫者		B
女給		A B A

物語

暴雨風の夜を衝いて斷崖の道路を疾走するタクシイの運轉手津島(上原)はバックラミラーに映つてゐる波多野(河村)を睨めながら、「逃げる氣か。貴樣に復讐しやうと思つて今日を得ちに待つてゐたんだ。貴樣からの僅かな借金の爲めに父は自殺する。母はその後を追つて狂死する。貴樣に十年間の恨みを晴らすのだ！」津島は決意のハンドルをいきなり左へ切つた。アッ！といふ恐怖の聲と一諸に自動車は眞逆樣に墜落してゆく。神祕な男とは何者か？

波多野は慘死した。然し津島は病院のベットの上で我に返へた。其處には波多野の娘、滿壽子(三宅)と波多野の書年の親友であつた渡邊牧師(西村)がゐた。そして津島の告白しようとすることは却つて彼の責任感の現はれとして蹠ぎられてしまつた。

それから彼は牧師の計らひで滿壽子の果樹園に働くことになつた。雄々しい津島に居て貰ふことは滿壽子の願ふところでもあつた。併し、斷はられた園丁で元來不良仲間の內藤(山田)は頭分の大作(廣瀨)に事の次第を告げた。大作は津島の從兄だつた。滿壽子の親友幸子(大塚)は兄の規矩雄が滿壽子を戀してゐるのをとりもつてダンスパーテーを催した。その會で顏を合せた大作は滿壽子の豚產橫領を津島を敎唆したが、津島にとつて今の滿壽子は、自分を機械科入學させやうとまでしてゐる恩人である。津島は、はつきりと斷つた。

尾木耕作(坂本)は牧師を通じて息子規矩雄と滿壽子との結婚を申込んだ。しかし滿壽子の意中の人ではなかつた。或る夜の酒場で津島と規矩雄は、お互ひに苦しい酒を酌み交した。津島は大作からの手紙に何事か獨り煩悶してゐる。滿壽子は今では津島を愛してゐるに違ひない。新築の別莊へ牧師も連れて三人で行かふと誘つたが津島は何故か獨り邸に留まることを願つた。……

別莊へ行く滿壽子と牧師を乘せた列車は山間の驛に着いた。其處には津島の口で言へない手紙が待つて居た。一方留守邸には强制された津島の手引で大作一味が浸入して居る。神祕な男＝津島一郎は果して如何なる行動に出でんとするのであるか？。

新興キネマ大泉撮影所特作

「女同志」

原作　吉屋信子
脚色　畑本秋一
監督　西鐵平
撮影　樗木喬

配役

澁川章　植村謙二郎
坂本香代　眞山くみ子
タイピスト眞弓　御影公子
澁川の義母　池田園子
編輯長　大井正夫
麹町の御前　中村順一郎
清浦登志　古川登美
壽美子（章の妹）　久慈行子
高利貸鶴山　大友壯之介
登志の母　明清江
登志の弟　岩永整
女給　春野蝶々

梗概

強ひられる結婚から逃れた坂本香代は東京で自活し乍ら畫に精進してゐる親友清浦登志を頼つて上京したが、間もなく不圖した機會で若い畫家の澁川章と相識り聽て戀愛に迄進んだ。勝氣な登志は香代を妹の様に愛し共に貧しさと闘ひ乍ら繪の道に勵む事を誓つたのであつたが、それだけに香代が澁川に心を惹かれる事が登志には不快で堪らなかつた。それが聽て澁川に對する憎悪とさへ變つたが、登志の氣持とは反對に、香代と澁川の戀愛は急速に熱烈となり遂に香代は登志との誓ひを裏切つて彼と結婚して了つた。澁川は義母と感情の衝突があつて妹の壽美子と共に高利貸の鶴山から金を借りてさゝやかな喫茶店を營み乍ら繪の勉強をしてゐるのであつたが、その生活は決して樂ではなかつた。

登志の精進は酬ひられて新聞雜誌の挿畫家として一躍名聲を得るに至つたが、澁川と香代の生活は日一日と苦しくなつて行くのであつた。自分を裏切つた香代ではあつたが、登志は友として彼女の窮狀を見過す事は出來なかつた。一度は憎んだ澁川の爲登志は雜誌社宛の紹介を與へた。けれども愚劣な小説の挿繪を描くなどと云ふ事が眞の情熱を以て畫道に精勵する者にとつての墮落とする澁川には折角の登志の好意も無駄だつた。登志は又香代に勸めて澁川の繪を知合の富豪の許に賣込ませやうとしたが、富豪の本當の目的が繪よりも美しい香代の肉體にある事や知つては所詮この登志の計らひも口惜しい思ひをさせるだけに終らねばならなかつた。追ひ迫る生活苦の中に澁川は病を得て倒れた。香代は壽美子とともにダンサーとして働く事となつた。併し彼女達の僅かな收入は鶴山への利子にも足りないものだつた。次第に惡化して行く澁川に醫師は轉地を勸めたが現在の役等には思ひも寄らぬ事だつた。香代は遂に悲しい決心の下に嘗て自分を望んだ富豪の許を訪れた。彼女の置手紙に依て、それと知つた登志の心に油然と湧き起つた香代への純愛はまつしぐらに彼女をして香代の後を追はせたのであつた。

それから間もなく登志と壽美子に見送られた澁川と香代は明るい希望の中に轉地の旅に上つたのである。

新興キネマ大泉撮影所特作

「合歡の並木」

原作　加藤武雄
脚色　陶山密
監督　小石一榮
撮影　青島順一郎

キャスト

お霜　田中筆子
お波　高野由美
お道　大崎愛子
千代子　橋爪文子
お高　瀧鈴子
時江　藤代新子
喜美子　御影公子
誠吉　淺田健三
眞藏　鳥橋弘一
勇吉　植村謙二郎
彌平　小宮一晃

梗概

華やかな都會への憧れから故郷を捨てたお波ではあつたが、彼女が、都會から酬ひられたものは僞りの戀が生んだ子だけであつた。

それさえも不實な男の爲に奪ひさられ身も心も疲れ果てた彼女を常に姉のやうな氣持でいたわるのはお波が都會で得た唯一の友千代子だつた。千代子の切なる勸めに依て兎も角彼女は歸鄉した。

けれども一度故鄉を捨てたお波に對する家族の態度は冷たかつた。唯母のお霜だけが心から溫かい愛の手をさしのべて傷ついた小鳥のやうな我子を迎えた。

鄉里の青年勇吉は嘗てはお波と未來を約した仲であつたが、お波に去られた後周圍の勸めで時江と云ふ娘と結婚することになつてゐた。けれどもお波の歸鄉に依て勇吉の氣持には大きな動搖が來た。

母はお波が父親や兄夫婦から冷淡にされるのを見兼ねて山を越えた町に住む次男夫婦の許へ托すことにした。間もなくお波は千代子からの手紙に依て男の手にある我子房子がその後入り込んだ喜美子と云ふ女給上りの女の爲に虐げられ通してゐると知り、堪らなくなつて再び故鄉を後にした。

房子いとしさに男の許を訪れた彼女はそれが眞實我子でありながら喜美子の爲却つて理不盡な云ひかゝりとさへされて茫然自失巷をさまよい歩いたお波は、自暴自棄の未遂に底知れぬ淪落の淵に沈んで行くのであつた。

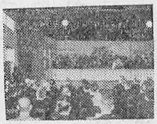
日は流れた。そしてある日お波は圖らずも廻り合つた千代子から房子が故鄉の家に引取られたこと、母お霜の病篤きことなどを聞いた。荒み切つた彼女の胸に母としての崇高な愛が蘇つた。

病床に尙且己れのことを案ずる母に對する自責がひし〳〵とその魂を鞭つた。故鄉への夜道をお波を乘せた車は走りに走つた。着いた我家には既に母の優しい聲を聞くことは出來なかつた。けれども微笑さへ浮んでゐるやうな安らかなその面は歸つて來た我子を喜び迎えるかのやうであつた。

「時江さんと仲よくれ」親子二人の新しい生活に入る決心をして、再び都會に向ふお波の勇吉に殘した――それは最後の言葉であつた。

劇壇往來 News

文樂座では表玄關に日智両國の國旗を交叉し國賓歡迎の意を表した。



▽五月七日
東久邇宮殿下の御台臨を仰ぎ七日午前十時三十分より大手前倚行社に於て開催された社團法人近畿觀光協會十周年記念總會の餘興として文樂座連が特別出演をなし津太夫の「挨拶」相生、文字、伊達、源、廣助、重造、友右衛門、文五郎、紋十郎らに依る「壽式三番叟」は滿場の喝彩を博した。

△五月五日
來朝中の智利國商業使節團長マキシミリアーノ・エラースリス氏(上院議員、特命全權大使資格)は息ラファエル氏、デシデリーオ・ガルシーア商工次官ギエルモ・ヴアレンスエーラ大藏次官、それにマルチン・フイゲローア特命全權公使ら一行十七名は午後文樂座へ車をつらね人形淨瑠璃五月興行を鑑賞したが三氏の許へ屆けられた三升は書伯の奇特を謝し興行中この繪を同座五階ホールの展覽會場に陳列展觀して打揚げ後はこの繪を香里成田不動尊別院妙王院に奉納大阪に於ける「不動」上演を永久に記念すると。

▽五月十二日
來阪中の長谷川仲氏は夜涙花座に現れ、自作の「百太郎騷ぎ」を見物し翫右衛門や長十郎らとも研究すべき點を檢討した。

▽五月十四日
歌舞伎座の三代中村歌右衛門追善興行に晴れの大阪初お目見得をしてゐる當代中村歌右衛門の愛孫中村兒太郎を始め、時藏の愛兒中村種太郎、中村梅枝、中村獅童、中村錦之助の四人及び友右衛門の愛息大谷廣太郎の六人を松竹前會長白井松次郎氏が引き具して午後一時より千日前竹林寺内不動尊へ參詣した。

この不動尊は三代歌右衛門が幼少の頃、役者を志して祕かに雪中水垢離をとつて祈願したところで歌右衛門は其後信仰厚く愈々役者になつてから稀代の名優と稱へられるに至つた、この由緒に因んで未だ幼少の六人の御曹子連が將來はあつぱれ名優になれるやうにとの祈願で俳優を我が兒の如く慈しむ白井松竹前會長が特に引率參詣する事となつたわけである。

▽五月十七日
歌舞伎座に出演中の中村吉右衛門時藏もしほを始め一門一黨を引具して、午前十時より茶臼山邦福寺に於て父歌六の法要を營んだ歌六は大阪で生れ大阪で育つた俳優で、吉右衛門は來阪の

都度法要を營むことが恒例になつてゐるが今度は久々の大阪入りなので大阪に於ける近親者や知己も招き法要をいとも盛大に行つた、尚父の忌に吉右衛門一句あり

「若葉する父の忌日や茶臼山」

▽五月二十二日

創立六年の記念日を迎えた前進座は午後一時浪花座の樂屋に前進座全員集合、現存は松竹庶務部長で前進座が創立最初の試練に逢着した例の燒失前後の市村座の事務だつた星野氏や後援會の連中も列席、赤飯をつゝき合つて苦闘六年の追懐に耽つた。

▽五月二十三日

文樂座五月興行の最後の舞臺として力演してゐる竹本土佐太夫野澤吉兵衛の兩師に此程東伏見伯より引退記念として錄盃が餞けられた、兩師は身の榮譽に感泣してゐる。

▽五月二十五日

劇作家豊岡佐一郎氏は去る二十日ごろから風邪のため病臥中のところ急性肺炎を併發し二十五日午後八時死亡した、享年四十一、二十七日午後二時から三時まで自宅で告別式が行はれた。氏は早大を出てから坪内士行氏とともに大阪で「藝術協會」を興し、その後新劇劇團「七月座」を主宰し、現在「大阪協同劇團」を指導するなど關西の新劇運動に貢獻した。

▽五月二十九日

二代目中村梅玉逝いて十七年、歌舞伎座出演中だつた三代目梅玉は午後一時より芦屋川山手の梅玉邸で劇壇關係者や知己を招いて十七回忌の法要を營んだ因に二代目梅玉の忌日は大正十年六月八日、享年八十一

▽五月三十日

六月一日初日で中座に二代目天勝襲名披露興行を開演する爲、特に補導格で華々しく出演する初代天勝が大阪市の坊ちやん孃ちやんの代表的なペットである天王寺動物園の人氣者リタ孃とロイド君に何か贈りものをしたいと云ひ出したので松竹では當局の許可を得て、午前十一時より同園内のステーヂで賑々しく陣羽織の贈呈式を行つた。

劇場建築專門並ニ
一般建築設計施工
池上建築工務所
事務所　東區京橋二丁目四八京阪ビル
電話東七二三一番
自宅　市外布施町菱屋西二七番
電話小坂五六八番

（宵月會々報）

（天）筆置て見てゐる蝶の行衛哉　金生　初蝶やいくさごつこの子に追はれつは子

（地）芽ふきて名なき庭木のいとほしき　武夫　釣竿に蝶々のとまる貴さがり　同

（人）三五人木の芽を愛つる夜の市　渡村　巡禮の笈にとまりしくろき蝶　同

祇園から八阪へそれし蝶々かな　金生　蝶飛ぶや橋の袂の小商ひ　同

葉を摘て匂ひ嗅き行く木の芽哉　同　飛ぶ胡蝶花にまぎれて失せにけりてい

母の忌や手向の花に蝶とまる　井蛙　蝶一つ子供二人はいどみあふ　同

追拔けて菜花に消ゆる胡蝶哉　昇朗　我袖をすれ〳〵に蝶もつれけり　同

風ふくや開きもあへぬ蝶の羽　井蛙　冬伐りし木は倒れゐて芽を吹きぬ　同

街路樹に木の芽萠えけりバスの雨　折鶴　草つめば小虫出てけり木の芽時　同

池水の青き日に增す木の芽かな　萩人　木の芽してある今宵の寒さかな　同

ふつくりと枝の先なる木の芽哉　井蛙　砂丘より蝶吹きあくる日和かな　煤蓑

普請場の木屑に遊ぶ蝶々かな　同

うす埃蝶舞ひ上る橋の上　煤蓑

晝すぎや蝶は疲るゝ背戸の中　同

吹きぬけの高燈籠や木の芽風　同

こま〳〵と住宅建ちぬ木の芽垣　同

木の芽風日曜の藏を開け放つ　同

木々の芽を育くむ夜の深山鳥　同

夕月に匂ふとばかり木の芽垣　同

穰生追吊

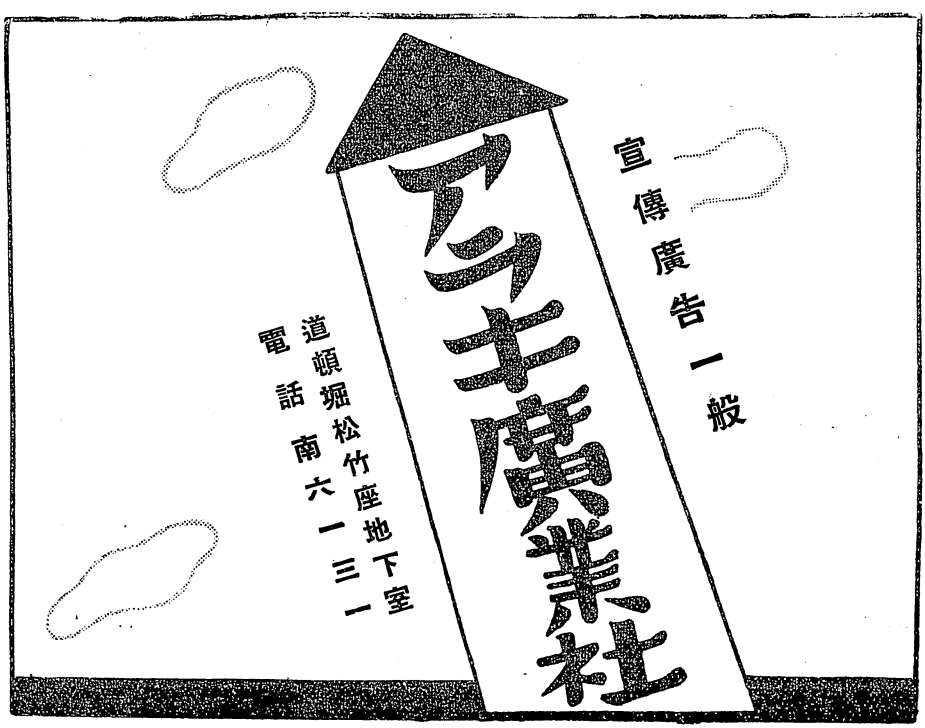
さらば〳〵花にかき消す如くなり　同

募集——夏季雜詠

◇投稿規定　はがきにて句數無制限

大阪市南久右衛門町八

松竹株式會社　道頓堀編輯部



―編輯後記―

✶

三代歌右追善や、東西花形劇等、歌舞伎謳歌の五月興行の後を受けた六月の關西劇壇は先づ歌舞伎座へ東京大新派が來場、中座は松旭齋天勝二代目披露興行又浪花座は金井修一座とまんざい連が出演、角座は堂々打越して三の替り公演を出す關西新派劇、南座は松竹家庭劇といつた各座各樣初夏に應しい異色ある陣容でファンの熱狂を集めてゐる。

✶

本誌特輯「天勝一代記」は京都編輯部の大橋君が天勝を訪問本誌にのみ許された特ダネ記事で他誌に見られない内容を盛つたものであると自負してゐます。

★

本號へ御寄稿下さいました諸先生方へ末筆乍ら厚く御禮申上げます。 ―池尻勝彦―

▼投稿規程▲

○俳句　★投稿所　「夏季雜吟」編輯部宛　日比煤蓑選

○川柳　★投稿所　「夏季雜吟」編輯部川柳係宛　田中牛耳樓選

以上締切　毎月二十日　用紙　ハガキ

○漫談・似顔・舞臺スケッチ・カット

締切　毎月二十二日　用紙　畫紙　投稿所　編輯部池尻宛

○讀者通信　演劇、映畫、レヴューに關して皆樣が云ひ度いこと、讀者より讀者への言葉などで、本欄は讀者への開放欄です。締切毎月二十五日、用紙十五字詰原稿用紙投稿所　編輯部池尻宛

○誌友クラブ　本誌を中心として讀者と劇壇の方々との親睦を計る意味と演劇映畫研究の特殊機關です、會費は無料　申込所　編輯部誌友クラブ宛

◎御注意　投稿用紙には必らず住所氏名明記のこと

昭和十二年六月十五日發行

月刊『道頓堀』第十二年第百廿九輯
雜誌

◇誌代は前金お拂を願ひます。
◇郵券代用は一割增にて御註文を願ひます。
◇御相談の上廣告掲載の儘に應じます。

廣告取扱所
大阪電報通信社
大阪市北區中之島二丁目
廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越下さい。

一部　金三拾錢（郵稅壹錢五厘）

昭和十二年六月十五日印刷
昭和十二年六月十五日發行

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹興業株式會社大阪支店
發行者　鳥江銕也
共同編輯　山上貞一　松本泰三
印刷所　道頓堀社印刷部

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹株式會社大阪支店
發行所　道頓堀編輯部
編輯京都支部
京都市姉小路東洞院西
大橋孝一郎方

あぶら取紙始祖　辻占添附

スキナあぶら取紙

姉妹品

スキナ紙白粉
スキナ石鹸

專賣特許　實用新案

スキナ御化粧紙
（あぶら取兼紙白粉）

各品共御愛用を乞ふ！

登録商標

發賣元　大阪　朝日堂株式會社

本舗　大阪　中田スキナ屋謹製

◎御注意　投稿用紙には必らず住所氏名明記のこと

編輯部誌友クラブ宛

京都市姉小路東洞院西
大橋孝一郎方

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和十二年五月廿八日印刷（毎月一回）
昭和十二年六月十五日發行
「道頓堀」第百廿九輯第十二年

中村鴈治郎追善映画

元祿快挙余譚 土屋主税

土屋主税 林長二郎

十平次 林 敏夫

（特別出演者）

土屋 大高源吾 高田浩吉

野 大石主税 林 敏夫

淺野内匠頭 中村正太郎

妹 園 （劇壇）中村芳子

寶井其角 （劇壇）市川箱登羅

大石内藏之助 （新興）嵐 德三郎

吉良上野介 （大船）上山草人

十平次母おさや （フリー）中村園枝

酒屋の小僧飛松 （長二郎愛息）林 成年

監督 犬塚稔

撮影 片岡清

松竹京都作品

「道頓堀」 第十二年 第百廿九輯

一部 金參拾錢